

与謝野晶子 訳

源氏物語

若菜（上）巻



一冊堂青空文庫

源氏物語

若菜（上）

紫式部

與謝野晶子訳

たちまちに知らぬ花さくおぼつかない天
よりこしをうたがはねども（晶子）

あの六条院の行幸のあつた直後から朱雀院の帝は御病氣になつておいでになつた。平生から御病身な方ではあつたが、今度の病におなりになつてからは非常に心細く前途を思召すのであつた。

「私はもうずっと以前から信仰生活にはいりたかつたのだが、太后がおいでになる間は自身の感情のおもむくままなことができないで今日に及んだのだが、これも仏の御催促なのか、もう余命のいくばくもないことばかりが思われてならない」

などと仰せになつて、御出家をあそばされる場合の用意をしておいでになつた。皇子

は東宮のほかには女宮様がただけが四人おいでになった。その中で藤壺の女御ふじつぼにょじと以前言われていたのは三代前の帝の皇女で源姓みなもとせいを得た人であるが、院がまだ東宮でいらせられた時代から侍さむらいしていて、後の位にも上つてよい人であったが、たいした後援をする人たちもなく、母方といっても無勢力で、更衣こういから生まれた人だったから、競争のはげしい後宮の生活もこの人には苦しうであつて、一方では皇太后が尚侍なうしのかみをお入れになつて、第一人者の位置をそれ以外の人に与えまいという強い援助をなされたのであつたから、帝も御心みこころの中では愍然びんぜんに思召しながら后に擬してお考えになることもなく、しかもお若くて御退位をあそばされたあとでは、藤壺の女御にもう光明の夢を作らせる日もなくて、女御は悲観をしたまままで病氣になり薨去こうきよしたが、その人のお生みした女三にょさんの宮を御子みこの中のだれよりも院はお愛しになつた。このころは十三、四でいらせられる。世の中を捨てて山寺へはいったあとに、残された内親王はだれをたよりに暮らすかと思召されることとが院の第一の御苦痛であつた。西山に御堂みどうの御建築ができて、お移りになる用意をあそばしながらも、一方では女三の宮の裳着もぎの挙式の仕度したくをさせておいでになつた。貴重なものな多くの御財産、美術の価値のあるお品々などはもとより、楽器や遊戯の具なども名品に近いような物は皆この宮へお譲りになつて、その他の御財産、お道具類を他の宮がた

へ御分配あそばされた。

東宮は院の重い御病氣と、御出家の御用意のあることをお聞きになって、お見舞いの行啓をあそばされた。母君の女御もお付き添いして行つた。殊寵しゅちゆうがあつたわけではないが、東宮の御母となる宿縁のあつた人を御尊重あそばされて、院はこの方にもこまやかにお話をあそばされた。東宮にも帝王とおなりになる日のお心得事などをお教えあそばされるのであつた。御年齢としよりも大人おとなびておいでになつたし、御後援をする人が母方のそばにも多くある方であつたから、院は御安心をしておいでになるのである。

「私はもうこの世に遺憾だと心に残るようなこともない。ただ内親王たちが幾人もいることで将来どうなるかと案ぜられることは、今の場合だけでなくこの世を離れる際にも絆ほだしになるであらうと思われる。今まで一般の世の中に見えても、女というものは、その人の意志でもなしに、ほかから働きかける者のために悪名も立てられ、恥辱も受けるような運命になっていくのがかわいそうだ。どの姉妹きょうだいにもあなたの御代みよが来た時にはあたたかい庇護を加えてやってもらいたい。その中でも後見をする母などのついている者は託して行く所があるような気もしてまずいいが、女三の宮は年のゆかないのに母のないう内親王なのだから、私だけをたよりにして育つてきたことを思うと、私が寺へはいっ

たあとではどんな心細い身の上になることかと気がかりでならない」

と、涙をお拭ぬぐいになりながら東宮へ後事をお頼みになるのであった。母君の女御にも信じ切ったようにして院は女三の宮のことを仰せになった。とはいっても昔宮中にあった時代には、内親王の御母の女御は格別な御寵愛ちようあいを得ていて、この方にとっては強力な競争者だったのであるから、その宮にまで憎悪ぞうおを持つわけではないが真心からお世話をする気にはなれなかったであろうと想像される。

院は明けても暮れても女三の宮の将来についてはかり御心配をあそばされるせいもあって、年末が近づいてから御容態がいちじるしくお悪くなり、御簾みすの外へおいでになることもなくなつた。これまでも妖氣もののけがもとでおりおりお煩わづらいになることはあつても、こんなに続いて永く御容態のすぐれぬようなことはなかつたのであるから、御自身では御命数の尽きる世が来たというように解釈をあそばすのであった。御退位になつてからも御在位時代に恩顧を受けた人たちは、今も優しく寛容な御性質をお慕い申し上げて、屈託なことがある時の慰安を賜わる所のようにして参候する慣ないになつていて、その人たちは院の御悩ごのうの重いのを皆心から惜しみ悲しんでいた。六条院からお見舞いの使いが常に来た。そのうち御自身でもおいでになりたいという御通知のあつた時、院は非常

にお喜びになった。六条院の御子の源中納言が参院した時に、御病室の御簾の中へお招きになり、朱雀院はいろいろなお話をあそばされた。

「お崩れになった陛下が御終焉の前に私へいろいろな御遺言をなされたのだが、その中で特に六条院と今の陛下のことについては熱心に仰せられて私へお託しになったのだが、帝王というものになつては、自分の意志を單純に実行へ移すことのできない点があつてね。個人としての愛は少しも変わらなかつたが、しかも私の過失によつて、あの方にとつて私が恨めしかつただろうと思うこともしたのに、今日までそれに対する復讐的なことは何の端にもお見せにならない。どんな賢人でも自身の問題になると恨むことも憎むことも凡人どおりにすることからいろいろな事件の起こるのは歴史の上にあることだからね。機会があれば私への復讐が姿になつて現われることであろうと、世人も言うことだつたし、私自身も罰を受ける氣でいたのだが、あの方に見たのは絶対の愛だけだつた。東宮などにも好意をお寄せになつたり、また現在では婿舅の關係までも作つていただいているのを私はどんなに感激しているかshれないが、愚かな上に盲目的な親の愛までも暴露してお目にかけることも恥ずかしくて、父である私が東宮に対してかえつて冷淡なふうをしている。陛下のことは院の御遺言どおりに万事計らつて位をお譲り申

し上げたから、この聖天子を国民がいただきうることになり、私の不名誉まで取り返していただいている。これだけは意志を強くして遂行なしえた善事だと信じて満足している。六条院にこの秋の行幸の節にお目にかかった時から、私の心にはしきりに青春時代の兄弟間の愛が再燃してお目にかかりたくてならない。直接お目にかかってお話し申したいこともある。ぜひ御自身でおいでくださるようになたからもお勧めしてほしい」などとしおれたふうで院が仰せられたのである。

「御過失でございましたか、正当な御処置でございましたか、昔のことは今になって御批評の申し上げようもございません。私が大人になりました一官吏の職を奉じますようになりましてから、私のために院がいろいろの注意を実例によってお与えくださいます際などにも、自分は冤罪えんざいによってどんなことが過去にあったというようなことを少しでも仰せになることはございません。一生を通じて陛下の御補佐をすべきであるのを、人生を静かに考えたい欲求から中途で閑散な地位に移らせていただいたために、故院の御遺言もお守りできぬことになり、またあなた様に対しては御在位の節には若輩であり、力もなく、上のかたがたが多くおいでにもなって、御自身の至誠をお尽くしする機会がなかったと申されまして、静かな御環境においでになります今日はせめてたびたび御訪

問も申し上げてお話も承りたいのを、さすがに事の大仰になるのに遠慮されて御無沙汰を申し上げているとこんなことをおりおり歎息たんそくしておいでになるのでございます」

などと中納言は申し上げた。二十歳はたちに少し足らぬのであるが、すべてが整って美しいこの人に院の御目はとまって、じつと顔をおながめになりながら、どう処置すべきかと御煩悶はんもんあそばされる姫宮を、この中納言に嫁がせたならと人知れず思召おもほしめされた。

「太政大臣の家に行っているそうだね。長い間私なども大臣の態度を腑ふに落ちなく思っていたところ、円満な結果を得てよいことと思っているが、またどうしたのか大臣がうらやまれもしてね」

との院の仰せを不思議に思って中納言は考えてみたが、それは女三の宮のお身の上をとやかくとお案じになって、相当な人があれば結婚をさせて安心して宗教の中へはいりたいという思召おもほしめしが院におありになるということがほかから耳にもはいっていたことであったから、その問題に触れて仰せられることかと気がついたものの、呑み込み顔なお返辞はできないことであった。ただ、

「つまらない者でございますから、配偶者を得ますこともとかく困難でございまして」と申し上げるのにとどめた。

のぞき見をしていた若い女房たちが、

「珍しい美男でいらっしやる。御様子だつてねえ、なんというぐりっぱさでしょう」

集まつてこんなことを言っているのを、聞いていた老けたほうに属する女房らが、

「それでも六条院様のあのお年ごろのおきれいさというものはそんなものではありませんでしたよ。比較には、まあありませんね、それはね、目もくらんでしまうほどお美しかったですよ」

と言つても、若い人たちは承知をしない。こうした争いのお耳にはいった院が、

「そのとおりだよ。あの人の美は普通の美の標準にはあてはまらないものだった。近ごろはまたいつそうりっぱになられて光彩そのもののような気がする。正しくしていられれば端麗であるし、打ち解けて冗談じょうたんでも言われる時には愛嬌あいぎょうがあふれて、二人とないなつかしさが出てくる。何事にもどうした前生の大きな報いを得ておられる人かとすぐれた点から想像させられる人だ。宮廷で育つて、帝王の愛を一身に集めるような幸福さがあつて、まったくだよ。故院は御自身の命にも代えたいほど御大切にあそばしたものが、それで慢心せず謙遜けんそんで、二十歳はたちまでには納言にもならなかった。二十一になつて参議で大将を兼ねたかと思う。それに比べると中納言の官等の上がり方は早い。子になり

孫になりして威福の盛んになる家らしい。實際中納言は秀才であり、確かな教養を受けている点で昔の光源氏にあまり劣るまい。父君の昔に越えて幸福な道を踏んでもそれが不当とも思えない偉さが彼にある」

と御甥をほめておいでになった。可憐な姫宮の美しく無邪気な御様子を御覧になつては、

「十分愛してくれて、足りない所は蔭で教育してくれるような、そして安心して託せるような人を婿に選びたい気がする」

などと仰せられた。

乳母の中でも上級な人たちをお呼び出しになつて、裳着の式の用意についていろいろお命じになることのあつたついでに、院は、

「六条院が式部卿の宮の女王を育て上げられたようにして、この宮の世話をする男はなのだろうか。普通人の中に私が選出するような人格者はまずないらしい。宮中には中宮がおいでになる。その下の女御たちもよい後援者のついている人ばかりだからね。たしいした後ろだてがなくて後宮の生活するのは苦勞の多いことに違いない。今日の権中納言が独身でいたところに話をしてみるのだった。若いがりっぱな秀才で将来の頼もしい

人らしいのに」

こんなこともお言いになった。

「中納言は初めからまじめ一方な方でございますから、今までも初恋のあの奥様のことばかりを思いつめて、失恋時代にもほかの話に耳をかさなかった人でございました。そのお姫様とごいっしょにおなりになったただ今では、第二の結婚のお話があの方を動かさうるものでもございますまい。私どもはかえって六条院様にその可能性がおりになるように存じ上げます。恋愛好きで女性に好奇心をお持ちになることは今も昔のままのようだと申すことでございます。その中でも最高の貴女に興味をお持ちあそばして、前齋院様などを今になつても思つておいでになるそうでございます」

と女宮の乳母の一人が申し上げた。

「その今でも恋愛好きである点はあるがたくないことだね」

院はこう仰せられたが、乳母が言うように六条院には多くの夫人や愛人があつて、唯一の妻と認めさせることはできないでも、やはりその人を親代わりの良人おとに選ぶのが最善のことであるかもしれぬというお考えを院はあそばしたようである。

「おまえの言うことはおもしろいよ。よい生き方をさせたいと思う女の子があつて、配

偶を求めるなら、あの院に愛されることを願うのがほんとうのようだ。人生は短いのだから、生きがいのあることをだれも願うべきだよ。私が女であれば兄弟であつても兄弟以上の接近もすることだろう。真実若い時に私はそう思つたのだ。そうなのだから女が誘惑にかかるのは道理で、また自然なことなのだよ」

院は御心みこころの中に尚侍なうしのの事件を思い出しておいでになつた。

この中の最も重立つた一人の乳母めのとの兄で、左中弁なながしの某は六条院の恩顧を受けて、親しくお出入りしていたが、一方ではこの姫宮を尊敬する伺候者の一人であつた。この人の来た時に妹である乳母が朱雀院すざくの御希望を語つた。

「この話をあなたから六条院様に機会おきがありましたら申し上げてみてください。内親王様は一生御独身が原則のようですが、婿君としてどんな場合にもお力の借りられる方をお持ちになるのは、御独身の宮様よりも頼もしく思われます。院のほかには誠意のあるお世話をお受けになる方をお持ちあそばさない宮様ですからね。私がどんなにお愛し申し上げていまして、それは限りのあることしかできないのですもの。それに私一人がお付きしているのでなくしておおぜいの人がいるのですから、だれがいつどんな不心得をして失礼な媒介役を勤めるかもしれません。そしてどんな御不幸なことになるかわかりま

せん。院がおいでになりますうちにこの問題が決まりますれば私は安心ができてどんなに楽だろうと思います。尊貴な方でも女の運命は予想することができませんから不安で不安でなりません。幾人いくたりもおいでになる姫宮の中で特別に御秘蔵にあそばすことで、また嫉妬しっどをお受けになることにもなりますから、私は気が気でもありません」

「お話はしますがよい結果が得られることかどうか。院は御恋愛の上で飽きやすいとか、気がよく変わるとかいうことはない方で、珍しい篤実性を持っておられます。仮にも愛人になすった人は、お気に入った入らぬにかかわらず皆それ相応に居場所を作っておあげになって、幾人いくたりもの御夫人、愛姫というものを持つておいでになるというもの、煎じせんつめれば愛しておいでになる夫人はお一人だけということになる方がおいでになるのだから、そのために同じ院内においでになるといっただけで寂しい思いをして暮らしておられる方も多いようですからね。もし御縁があつて姫宮があらへお移りになった場合には、紫の女王様がどんなにすぐれた奥様でも、これにお勝ちになることは不可能でしょうとは思いますが、あるいは必ずしもそういかな場合も想像されます。しかしまだ院が、自分はすべての幸福に恵まれているが、熱愛では人の批難を受けもしているし、私自身にも不満足を感じる点もあると何かの場合にお洩もらしになるが、私らとし

でもそう思われる節ふしがないでもない。夫人がたといつても今までの方はただの女性で、内親王がたが一人も混じつておいでになりませんからね。私らとしては院の御身分として姫宮様級の御夫人があつてしかるべきだと思われまますからね。今度のことが実現されたらどんなにすばらしい御夫妻だろう」

と左中弁は言うのであつた。乳母めのとは何かのことを朱雀院すざくへ申し上げたついでに、自分が試みに前日兄の左中弁へした話を申し上げて、

「兄が申しますのには院は必ず御承諾あそばされることと思う。六条院は年来の御希望がかなうことと思召おぼしめすに違いない御縁談であるから、こちらのお許しさえあればお伝えいたしましたように申しました。どういたしたらよろしゅうございましょう。御愛人にはそれぞれの御身分に応じた御待遇をあそばしまして、思いやりの深いお方様と承りますけれど、普通の女の方でもほかに愛妻のある方と結婚をすることを幸福とはいたさないでございいますから、御不快な思いをあそばすことがないとも思われません。姫宮様をいただきたいと望む人はほかにもたくさんあるのでございいますから、よくお考えあそばしましてお決みなさいましますのがよろしゅうございましょう。宮様は最も尊貴な御身分でいらつしやいますが、ただ今の世の中ではりりしく独身生活をりっぱにしていく婦人が

たもありますのに、三の宮様はどうもその点で御安心申し上げられない強さが欠けてお
いであそばすのですから、私たち侍女どもは一所懸命の御奉仕をいたしましても、それ
はたいした宮様のお力になることでもございせんから、世間の女の例によつて、変則
な独身でお立ちになろうとあそばさないで、御結婚をあそばすほうが御安心のおできに
なることと存じます。特別な御後見をなさいます方のないのはお心細いことでないかと
存じ上げます」

と、自身の意見も述べた。

「私も宮のことをいろいろと考えて、内親王は神聖なものとしておきたくも思うし、ま
た高い身分の者も結婚したがために、内輪のことも世評に上るようになるし、しないで
よいはずの煩悶はんもんで自身を苦しめることにもなるのだからと否定に傾きもするのだが、ま
た親兄弟にも別れたあとで、女が独身でいては、昔の時代の人は神聖なものは神聖なも
のとしておいたが、近代の男はそれを無視して強要的な結婚を行なうのに躊躇ちゅうちよしない悪
徳を平気でするようになったために、いろんな噂うわさの種もまくのだがね。昨日きのうまでは尊貴
な親の娘として尊敬されていた人が、つまらぬ男にだまされて浮き名を立て、ある者は
死んだ親の名誉をそこなうという類たぐひの話は幾つもあるから、姫宮であつても女であれば

同じことで、宿命などということにはわからぬものだから、私が配偶者を選ばずに捨てておくことは不安だとも一方では考えられる。良くなっても悪くなっても、それは自発的に決めたことでなくて親や兄が選んだ結婚をしておれば、悪いことがあとにあってもその人の責任にはならないで済むし、恋愛結婚のあとが良くなれば、ああしたことの結果も良くなるものであるとは見えても、その初めに噂の広まったところには、親の同意も得ず、家族も許さないのに恋愛をして良人おっとを持ったということは女の第一の恥と聞こえるからね。それは普通の家の娘の場合でも軽佻けいちように思われることに違いない。また自分は自分の身体からだの持ち主であるのに、それを暴力で蹂躪じゅうりんされた結果、意外な男の妻になるようなことも軽率で、その女を侮蔑ぶべつしたくなるが、姫宮も元来弱い、隙すきの見える性質ではないかと私は心配しているのだから、侍女どもが勝手なことを宮に押しつけるようなことをさせてはならないよ。そんな噂が世間へ聞こえては恥ずかしいからね」

などとお別れになったあとのことまでもお案じになつて仰せられることで、乳母たち、女房たちは責任の重さを苦勞に思った。

「もう少し大人になられるまで私がついていたいと、今まで念じ続けてきたものだが、このごろの健康状態でそうしては、信仰生活にはいることもできずに死んでしまう

のではないかという気がされるので、やむをえず出家を断行することにした。六条院に託しておくのが、なんといつてもいちばん安心のことができることだと思う。幾人いくたりも侍している夫人はあつてもそれをいちいち念頭に置いてゆかねばならぬことでもなし、ただ主觀的にこちらさえ寛大な心を持つて臨めばよいことなのだ。はなやかな時代も過ぎて平淡な心境におられるあの院に三の宮の良人おととなつていただくことは最も安心なことだと私は認めている。そのほかに適当な候補者はないよ。兵部卿ひょうぶきやうの宮は風采ふうさいも人物もひととおりはりっぱな人だがね、それに私としては兄弟のことだから他人のようにひどい批評はできないものの、とにかくあの人はあまりに柔弱で、芸術家に傾き過ぎて、世間の信望が少し薄いようだ。そんなふうな人は良人として頼もしくは思われない。また大納言が臣礼をもつて奉仕しようというのは親切な男というべきだが、さてそれに許してやる気にはちよつとなれない。やはり普通の男の妻には与えにくい気がする。昔の時代にも帝王の婿にはある一事の傑出した人物が選ばれたようだ。ただ都合のよいというようなことで人選するのは恥ずかしいことだ。右衛門督うゑもんのかみがやはりその希望を持っているということないしのかみを尚侍が言っていたが、あれだけはすぐれた人物だから、官位がもう少し進んでいたら私も大いに考慮するが、まだ今のところでは地位が不十分だ。理想が高くてだれと

も結婚をせずにまだ独身でいて思い上がった精神が実によい。学問も相当なものだし、廟堂びやうどうに立って仕事のできる点で将来も有望だが、私には愛女の婿はそれでもないという心がある。相当に濃厚にある」

こんなふうおぼしめに仰せられて院はお心を悩ませておいでになった。多い候補者の中の婿選にょせんびを困難に思召おもほしめす女三にょさんの宮以外の姉宮がたに求婚をする人はさてないのである。院がどんなにその一方ひとかたをお愛しになって、よい配偶をお決めになることに専心しておいになるかということが、院内から自然に外へ聞こえ、自身を候補に擬しているものが多いのである。太政大臣も長男の右衛門督がまだ独身でいて、妻は内親王でなければ結婚はせぬと思うふうであるから、御降嫁が決定してだれもお許しを願って出た時に、院の御婿に長男が選ばれたなら、どんなに自身のためにも光栄であるかしの考え、院の御寵姫ちようきの尚侍の所へは、その人の姉である夫人から言わせて運動もし、一方では直接お話も申し上げて懇請もしていた。兵部卿の宮は左大将の夫人に失恋をあそばされたのであるから、その夫婦に対してもりつぱでない結婚はできないようにお願いになって、夫人を選んでおいでになる場合であつたから、お心の動かないわけではない。非常に熱心な求婚者で宮はおありになった。藤大納言とうは長い間院の別当をしていて、親しく奉仕して

来た人であつたから、院が御寺^{みでら}へおはいりになれば有力な保護者を失いたてまつることになるのを、内親王と結婚をして今後も地位の保証を得たいという功利的な考えからしきりにお許しを乞^こうているのであつた。源中納言^{げん}も院の御婿の候補者が続出するのを見ては、この人には間接でなく、あれほどにも明瞭^{めいりょう}に御意のあるところをお見せになつたのであるから、中間によい人を得て姫宮をお望み申し上げた場合には冷淡な態度を院はおとりになるまいという自信もあつて、心がときめきもするのであるが、自身を信頼している妻を見ては、過ぎ去つたあの苦しい境地に置かれて、もう絶縁をしてもよかつた時代にさえなお自分はこの人以外の女を対象として考えようともしせず通して来て、二度目の結婚を今さらすればにわかに妻は物思いをすることになろうし、一方が尊貴な人であれば自分の行動は束縛されて、思つていてもこちらを同じに扱うことができずに、左にも右にも不平があれば自分は苦しいことであろうという氣になつて、元來が多情な人ではないのであるから、動く心をしいておさえて何とも表面へは出さないのであるが、さすがに姫宮の婚約が他人と成り立つことは願われないで、この人のためには一つの心を離れぬ問題にはなつた。東宮もこの婿選びのことをお聞きになつて、

「目前のことよりも、そうしたことは後世への手本にもなることですから、よくお考え

になった上で人を選定あそばされるがよろしく思われます。どんなにりっぱな人物でも普通人は普通人なのですから、結局は六条院へお託しになるのが最善のことと考えます」

とこれは表だった使いで進言されたのではないが、ある人をもって申された。

「もつともな意見だ。非常によい忠告だ」

院はこうお言いになって、いよいよその心におなりになり、まず三の宮のお乳母めのとの兄である左中弁から六条院へあらましの話をおさせになった。女三の宮の結婚問題で院が御心痛をしておいでになることは以前から聞いておいでになったから、

「御同情する。お気の毒に存じ上げている。しかし院が御生命の不安をお感じになったとすれば、私だって同じことなのだからね。どれだけあとへお残りする自信をもって御後事がお引き受けできると思うかね。御兄が先で、弟があとというそれも決まっていもせぬことを仮にそうとして私が何年かでも生き残っている間は、どの宮だって血縁のある方なのだから私はできるだけの御保護はするつもりなのに、しかも特別お心がかりに思召おぼしめす方にはまた特別のお世話もするが、しかしそれだって無常の人生なのだから、自分の生命いのちが受け合われない」

とお言いになって、また、

「まして私の妻にしておくことはどんなによくないことかしかない。私が院に続いて亡くなる時に、どんなにまたそれが私の気がかりになることか。私だけのことを考えても執着の残ること、なすべきことでないと思われる。私の子の中納言などは年も若くて軽い身分であっても、将来のある人物だからね。国家の柱石となる可能性を持っているのだから、中納言などへ御降嫁になってもそれが調和のとれないことは思われない。しかしあまりにまじめ過ぎる男で、一人の妻と円満に家庭を持っているということで院は御遠慮になるだろうか」

こうもお言いになって、御自身の結婚問題としてお取り上げにならないのを弁は見ずく、朱雀院のほうでは堅い御決意で申し入れをさせておいでになるのであるがと残念にも思い、朱雀院をお気の毒にも思つて、あちらの院がこのことの成り立つのを熱望しておいになる事情をくわしく申し上げると、さすがに院は微笑をされて、

「非常な御愛子なのだろうから、いろいろと将来を御心配になつてのお考えだろう。宮中へお上げになればいいではないか。りっぱな後宮のかたがたがすでにおられるからといって、望みのないもののように思われるのは誤りだよ。故院の時に皇太后が東宮時代

からの最初の女御で、たいした勢力を持つておいでになったが、それがずっとのちにお上がりになった入道の宮様にその当時はけおとされておしまいになった例もあるのだからね。その宮の母君の女御は入道の宮のお妹さんだった。御容貌なども入道の宮に続いて美しいという評判のあつた方だから、御両親のどちらに似てもこの宮は平凡な美人ではおありになるまい」

などと言つておいでになった。好奇心は持つておいでになるらしいのである。

歳暮に近くなつた。朱雀院では院の御病氣がそのまま続いてお悪いために、姫宮の裳も着ぎの式をお急ぎになり、準備をいろいろとさせておいでになったが、過去にも未来にもないような華美なお儀式になる模様で、だれもだれも騒ぎ立っていた。式場は院の栢殿かえだのの西向きのお座敷で御帳おんとばり、几帳きちようその他に用いられた物も日本の織物はいっさいお使いにならず唐の後の居室の飾りを模うつして、派手はでで、りっぱで、輝くようにでき上がっていた。御腰結ゆいいの役を太政大臣へ前から依頼しておありになったが、もったいぶつたこの人は気は進まないまま、院のお言葉には昔からそむくことのなかつたほど好意をお示しする用意は常に持つて、御辞退ができずに参列したのであつた。そのほかの左右二大臣、高官らも万障を排し病氣もしいて忍ぶまですして座に加わつたものである。親王様

はお八方来ておいでになった。いうまでもなく殿上人の数は多かった。宮中の奉仕をする者も東宮の御殿へお勤めする者も残らず集まったのであって、盛大なお儀式と見えた。やがて出家をあそばされようとする院の最後のお催し事と見ておいでになって、帝も東宮も御同情になり宮中の納殿おさめどのの支那渡来しなの物を多く御寄贈になったのであった。六条院からも多くの御贈り物があつた。それは来会者へ纏頭てんとうに出される衣服類、主賓の大匠への贈り物の品々等である。中宮からも姫宮のお装束、櫛くしの箱などを特に華麗に調製おさせになって贈られた。院が昔このお后じゅだいの入内の時お贈りになった髪上げくしあの用具に新しく加工され、しかももとの形を失わずに見せたものが添えてあつた。中宮権亮ごんのすけは院の殿上へも出仕する人であつたから、それを使いにあそばして、姫宮のほうへ持参するように命ぜられたのであるが、次のようなお歌が中であつた。

さしながら昔を今につたふれば玉の小櫛をぐしぞ神さびにける

これを御覧になった院は身にしむ思いをあそばされたはずである。縁起が悪くもないであろうと姫宮へお譲りになった髪かみの具は珍重すべきものであると思召されて、青春の

日の御思い出にはお触れにならず、お悦びの意味だけをお返事にあそばされて、

さしつぎに見るものにもが万代よろづよをつげの小櫛も神さぶるまで

とお書きになった。

御病氣は決して御輕快になつていなかったのを、無理あそばして御挙行になつた姫宮のお裳着の式から三日目に院は御髪みぐしをお下ろしになつたのであつた。普通の家でも主人がいよいよ出家をするという時の家族の悲しみは大きなものであるのに、院の御ためには悲しみ歎なげく多くの後宮の人があつた。尚侍はじつとおそばを離れずに歎なげきに沈んでいのを、院はなだめかねておいでになつた。

「子に対する愛は限度のあるものだが、あなたのこんなに悲しむのを見ては私はもう堪えられなく苦しい心になる」

と仰せになつて、御心みこころは冷静でありえなくおなりになるのであろうが、じつと堪えて脇息ききようそへによりかかつておいでになつた。延暦寺えんりやうじの座主ざすのほかに戒師を勤める僧が三人参つていて、法服に召し替えられる時、この世と絶縁をあそばされる儀式の時、それは皆悲

しいきわみのことであつた。すでに恩愛の感情から超越している僧たちでさえとどめがたい涙が流れたのであるから、まして姫宮たち、女御、更衣、その他院内のあらゆる男女は上から下まで嗚咽おえつの声をたてないでいられるものはない、こうした人間の声は聞いていずに、出家をすればすぐに寺へお移りになるはずの、以前の御計画をお変えになつたことを院は残念に思召おぼしめして、皆女三の宮へ引かれる心がこうさせたのであるとかたわらの者へ仰せられた。宮中をはじめとしてお見舞いの使いの多く参つたことは言うまでもない。

六条院は朱雀院すざくの御病氣が少しおよろしい報せしらをお得になつて御自身で訪問あそばされた。宮廷から封地ほうちをはじめとして太上天皇たいしやうと少しも變わりのない御待遇は受けておいでになるのであるが、正式の太上天皇として六条院は少しもおふるまいにならないのである。世人のささげている尊敬の意も信賴の心も並み並みではないのであるが、外出の儀式なども簡単にあそばして、たいそうでない車に召され、お供の高官などは車で従つて参つた。朱雀院法皇はこの御訪問を非常にお喜びになつて、御病苦も忍ぶようにあそばされて御面会になつた。形式にはかかわらずに御病室へ六条院の今一つの座をお設けになつて招ぜられたのである。御髪みぐしをお剃りそ捨てになつた御兄の院を御覽になつた時、

すべての世界が暗くなったように思召されて、悲歎ひたんのとめようもない。ためらうことなくすぐにお言葉が出た。

「故院がお崩れかぐになりましたところから、人生の無常が深く私にも思われまして、出家の願いを起こしながらも心弱く何かのことに次々引きとめられておりまして、ついになた様が先にこの姿をあそばすまになつてしまいました。自分はなんというふがいなさであろうと恥ずかしくてなりません。一身だけでは何でもなく出離しゅつりの決心はつくのでございますが、周囲を顧慮いたします点で実行はなかなかできないことでございます」

と、お言いになって、慰めえないお悲しみを覚えておいでになるふうであつた。朱雀すざく院も御病氣であつて心細いお気持ちもあそばされる時であつたから、冷静なふうなどはお作りになることができずにしおしおとした御様子をお見せになり、昔の話、今の話を弱々しい声であそばすのであつたが、

「今日か、明日かと思われるような重態でいて、しかも生き続けていることに油断をして、希望の出家も遂げないで亡なくなるようなことがあつてはと奮発をして実行したのですよ。こうなつても生命いのちがなければしたい仏勤めもできないでしょうが、まず仮にも一つの線を出ておいて、はげしいお勤めはできないでも念仏だけでもしておきたいと思い

ます。私のような者が今日生きているということはこの志だけは遂げたいという望みに燃えていたのを仏が憐あわれんでくださったのだと自分でもわかっているのに、まだお勤めらしいこともしていないのを仏に相済まなく思います」

御出家についての感想をこうお述べあそばしたのに続いて、

「女の子を幾人も残して行くことが気がかりです。その中で母も添っていない子で、だれに託しておけばよいかわからぬような子のために最も私は苦悶くもんしています」

と、仰せになった。正面からその問題をお出しにもならない御様子をお気の毒に六条院は思召おぼしめされた。お心の中でもその宮についていささかの好奇心も動いているのであるから、冷ややかにこのお話を聞き流しておしまいになることができないのであった。

「ごもつともです。普通の家の娘以上に内親王のお後ろだてのないのは心細いものでございます。ごりっぱな儲君ちよくんとして天下の輿望よぼうを負うておいでになる東宮もおいでになるのでございますから、あなた様から特にお心がかりに思召す方のことをお話にさえあそばされておけば、一事でもおろそかにあそばさないはずで、何も将来のことをそう御心配になることはなかりうと申しますものの、即位をなさいました場合にも天子は公の君ですから政はお心のままになりまして、個人として女の御兄弟に親身のお世話をなさ

れ、内親王が特別な御庇護をお受けになることはむずかしいでしょう。女の方のためにはやはり御結婚をなすつて、離れることのできない関係による男の助力をお得になるのが安全な道と思われませんが、御信仰にもさわるほどの御心配が残るのでございましたら、ひそかに婿君を御選定しておかれましてはと存じます」

「私もそうは思うのですが、それもまたなかなか困難なことですよ。昔の例を思ってもその時の天子の内親王がたにも配偶者をお選びになつて結婚をおさせになることも多かったのですから、まして私のように出家までもする凋落ちようらくに傾いた者の子の配偶者はむずかしい。資格をしいて言いませんが、またどうでもよいとすべてを言つてしまうこともできなくて煩悶はんもんばかりを多くして、病氣はいよいよ重るばかりだし、取り返せぬ月日もどんどんたつていくのですから氣が氣でもない。お氣の毒な頼みですが、幼い内親王を一人、特別な御好意で預かつてくだすつて、だれでもあなたの鑑識にかなった人と縁組みをさせていただきたいと私はそのことをお話ししたかったのです。権中納言などの独身時代にその話を持ち出せばよかつたなどと思うのです。太政大臣に先を越せんされてうらやましく思われます」

と朱雀院は仰すげせられた。

「中納言はまじめで忠良な良人になりうるでしょうが、まだ位なども足りない若さですから、広く思いやりのある姫宮の御補佐としては役だちませんでしょう。失礼でございますが、私が深く愛してお世話を申し上げますれば、あなた様のお手もとにおられますのとないたした変化もなく平和なお気持ちでお暮らしになることができるであろうと存じますが、ただそれはこの年齢の私でございますから、中途でお別れすることになるうと
いう懸念が大きいのでございます」

こうお言いになって、六条院は女三によさんの宮みやとの御結婚をお引き受けになったのであった。

夜になったので御主人の院付きの高官も六条院に供奉ぐぶして参った高官たちにも御饗応きようおうの膳ぜんが出た。正式なものでなくお料理は精進物の風流な趣のあるもので、席にはお居間が用いられた。朱雀院のは塗り物でない浅香の懸盤かけばんの上で、鉢はちへ御飯を盛る仏家の式のものであった。こうした昔に変わる光景に列席者は涙をこぼした。身にしむ気分の出た歌も人々によって詠よまれたのであったが省略しておく。夜がふけてから六条院はお帰りになったのである。それぞれ等差のある纏頭てんとうを供奉の人々はいただいた。別当大納言はお送りをして六条院へまで来た。

朱雀院は雪の降っていたこの日に起きておいでになったために、また風邪をお引き添えになったのであるが、女三の宮の婚約が成り立ったことで御安心をあそばされた。

六条院も新しい御婚約についての責任感と、紫夫人との夫婦生活の形式が改められねばならぬことをお思いになる苦痛とがお心でいっしょになつて煩悶はんもんをしておいでになった。朱雀院がそうした考えを持つておいでになるということは女王にようおうの耳にもはいつていたのであるが、そんなことにもなるまい、前齋院にあれほど恋はしておられたがしいて結婚も院はなさらなかったのであるからなどと思つて、そうした問題のありなしも問わずにいて、疑つていないのを御覧になると、院は心苦しくて、何と思うであろう、自分のこの人に対する愛は少しも変わらないばかりでなく、そういうことになればいいよ深くなるであろうが、その見きわめがつくまでに、この人は疑つて自分自身を苦しめることであろうとお思いになると、お心が静かでありえない。今日になつてはもう二人の間に隔てというものは何一つ残さないことに馴なれた御夫妻であつたから、この話をすぐ話さずにおいでになるのも院は苦痛にされながらその夜はお寝やすみになった。

翌日はなお雪が降つて空も身にしむ色をしていた。六条院は紫の女王と来し方のこと、未来のことをしみじみと話しておいでになった。

「院の御病氣がお悪くて衰弱しておいでのなるのを お見舞い にながって、いろいろと身にしむことが多かった。女三の宮のことではまだに御心配をしておられて、私へこんなことを仰せられた」

院はその方を託したいと朱雀院の仰せられた話をくわしくあそばされた。

「あまりにお氣の毒なので御辞退ができなかったのだが、これをまた世間は おおぎよう かいちよう 大仰に吹聴をするだろうね。私はもう今はそうした若い人と新しく結婚するような興味はなくなっているのだから、最初人を介してのお話の時は口実を設けてお断わり申していたのだが、直接お目にかかった際に、御親心というものがあまりに濃厚に見えて、冷淡に辞退をしてしまうことができなかったのですよ。郊外の寺へいよいよ院がおはいりになる時になってここへ迎えようと思う。味気ないこととあなたは思うでしょう。そのためにどんな苦しいことが一方に起こっても、私があなたを思うことは現在と少しも変わらないだろうから不快に思つてはいけませんよ。宮のためにはかえつて不幸なことだと私は知っているが、それも体面は作つてあげることを じようず 上手にしますよ。そして双方平和な心でいてもらえれば私はうれしいだろう」

などと言われるのであった。ちよつとした恋愛問題を起こしても自身が侮辱されたよ

うに思う女王であつたから、どんな氣がするだろうとあやぶみながら話されたのであつたが、夫人は非常に冷静なふうでいて、

「親としての御愛情から出ましたお頼みでございましょうね。私が不快になど思うわけはございません。あちらで私を失礼な女だとも、なぜ遠慮をしてどこへでも行つてしまわないかともおとがめにならなければ、私は安心しております。お母様の女御は私の叔母様でいらっしゃるわけですから、その続き合いで私を大目に見てくださるでしょうか」

と卑下した。

「あなたのそれほど寛大過ぎるのもなぜだろうとかえつて私に不安の念が起こる。それはまあ冗談だが。まあそんなふうにも見てあなたが許していてくれて、一方にもその心得でいてもらつて、平和が得られれば私はいよいよあなたを尊敬するだろう。中傷する者があつて何を言おうともほんとうと思つてはいけませんよ。すべて噂というものは、だれがためにするところがあつて言い出すというのでもなく、良いことは言わずに、悪いことを言うのがおもしろくて言いふらさせるものだが、そんなことから意外な悲劇がかもされもするのだから、人の言葉に動揺を受けないで、ただなるがままになっている

のがいいのです。まだ実現されもせぬうちから物思いをして私をむやみに恨むようなことをしないでくださいね」

こう院はおさとしになった。女王は言葉だけでなく心の中でも、こんなふう天から降ってきたような話で、院としては御辞退のなされようもない問題に対して嫉妬しつとはすまい、言えばとてそのとおりになるものでもなく、成り立った話をお破りになることはないのであろう、院のお心から発した恋でもないから、やめようもないのに、無益な物思いをしているような噂は立てられたくないと思った。継母ままははである式部卿しきぶきょうの宮の夫人が始終自分を誣のろうようなことを言っておいでになって、左大将の結婚についても自分のせいでもあるように、曲がった恨みをかけておいでになるのであるから、この話を聞いた時に、誣のろいが成就したように思うことであらうなどと、穏やかな性質の夫人もこれくらいのこととは心の蔭かげでは思われたのであった。今になってはもう幸福であることを疑わなかった自分であった。思い上がって暮らした自分が今後はどんな屈辱に甘んじる女にならねばならぬかしれぬと紫の女王は愁うれいながらもおおようにしていた。

春すがくになった。朱雀院では姫宮の六条院へおはいりになる準備がととのつた。今までの求婚者たちの失望したことは言うまでもない。帝みかども後宮にお入れになりたい思召おぼしめしを伝

えようとしておいでになったが、いよいよ今度のお話の決定したことを聞こし召されておやめになった。六条院はこの春で四十歳におなりになるのであつたから、内廷からの賀宴を挙行させるべきであると、帝も春の初めから御心みこころにかけさせられ、世間でも御賀を盛んにしたいと望む人の多いのを、院はお聞きになつて、昔から御自身のことであつた。そんな式などをする事のおきらいな方だつたから話を片端から断わつておいでになつた。

正月の二十三日は子ねの日であつたが、左大將の夫人から若菜わかなの賀をささげたいという申し出があつた。少し前まではまったく秘密にして用意されていたことで、六条院が御辞退をあそばされる間がなかつたのであつた。目だたせないようにはしていたが、左大將家をもつてすることであつたから、玉鬘夫人たまかすらの六条院へ出て来る際の従者の列などはいしたものであつた。南の御殿の西の離れ座敷に賀をお受けになる院のお席が作られたのである。屏風びやうぶも壁代かべしろの幕も皆新しい物で装しつらわれた。形式をたいそうにせず院の御座に椅子いすは立てなかつた。地敷きの織物が四十枚敷かれ、褥しとね、脇息きようひでくなど今日の式場の装飾は皆左大將家からもたらしした物であつて、趣味のよさできれいに整えられてあつた。螺鈿らでんの置き棚だな二つへ院のお召し料の衣服箱四つを置いて、夏冬の装束、香壺かうび、菓の箱、

お硯すずり、洗髪器ゆするつき、櫛くしの具の箱なども皆美術的な作品ばかりが選んであった。御挿頭かざしの台は沈じんや紫檀したんの最上品が用いられ、飾りの金属も持ち色をいろいろに使い分けてある上品な、そして派手はでなものであった。玉鬘夫人は芸術的な才能のある人で、工芸品を院のために新しく作りそろえたすぐれたものである。そのほかのことはきわだたせず質素に見せて実質のある賀宴をしたのであった。参列者を引見されるために客座敷へお出しになる時に玉鬘夫人と面会された。いろいろの過去の光景がお心に浮かんだことと思われる。院のお顔は若々しくおきれいで、四十の賀などは数え違いでないかと思われるほど艶えんで、賀を奉る夫人の養父でおありになるとも思われないのを見て、何年かを中に置いてお目にかかる玉鬘たまかむらの尚侍なうしのは恥ずかしく思いながらも以前どおりに親しいお話をした。尚侍の幼児がかわいい顔をしていた。玉鬘夫人は続いて生まれた子供などをお目にかけるのははかっていたが、良人おっとの左大將はこんな機会にでもお見せ申し上げておかねばお逢あわせすることもできないからと言って、兄弟はほとんど同じほどの大きさで振り分け髪のうしに直衣ちういを着せられて来ていたのである。

「過ぎた年月のことというものは、自身の心には長い気などはしないもので、やはり昔のままの若々しい心が改められないのですが、こうした孫たちを見せてもらうことで

わかに恥ずかしいまでに年齢としを考えさせられます。中納言にも子供ができているはずなのだが、うとい者に私をしているのかまだ見せませんよ。あなたがだれよりも先に数えてくだすって年齢としの祝いをしてくださる子ねの日も、少し恨めしくないことはない。もう少し老いは忘れていたいのですがね」

と、院は仰せられた。玉鬘もますますきれいになって、重味というようなものも添ってきてりっぱな貴婦人と見えた。

若葉さす野辺のべの小松をひきつれてもとの岩根を祈る今日かな

こう大人おとなびた御挨拶あいさつをした。沈じんの木の四つの折敷おしきに若菜を形式的にだけ少し盛って出した。院は杯をお取りになつて、

小松原末のよはひに引かれてや野辺の若菜も年をつむべき

などとお歌いになった。高官たちは南の外座敷の席に着いた。式部卿の宮は参りにく

く思召おもほしめしたのであるが、院から御招待をお受けになって、御舅しゅうとでいらせられながら賀宴

に出ないことは含むことでもあるようであるからとお思いになり、ずっと時間をおくらせておいでになった。以前の婿の左大將が御養女の婿として得意な色を見せて、賀宴の主催者になっているのを御覧になる宮は、御不快なことであろうとも思われたが、御孫である左大將家の長男次男は紫夫人の甥おいとしても、主催者の子としても席上の用にいろいろと立ち働いていた。籠詰かこめの料理の付けられた枝が四十、折櫃おりびつに入れた物が四十、それらを中納言をはじめとして御親戚しんせきの若い役人たちが取り次いで御前へ持つて出た。院の御前には沈じんの懸盤かけばんが四つ、優美な杯の台などがささげられた。朱雀院すざくがまだ御全快あそばさないで、この御宴席で専門の音楽者は呼ばれなかった。楽器類のことは玉鬘夫人の実父の太政大臣が引き受けて名高いものばかりが集められてあった。

「この世で六条院の賀宴のほかに、高尚こうしょうなものの集まってよい席というものはない筈なのだ」

と言つて、大臣は当日の楽器を苦心して選んだ。それらで静かな音楽の合奏があった。和琴わじんはこの大臣の秘蔵して来た物で、かつてこの名手が熱心に弾ひいた楽器は諸人がかき立てにくく思うようであつたから、かたく辞退していた右衛門督うゑもんのかみにぜひにと弾ひくこ

とを院がお求めになったが、予想以上に巧みに名手の長男は弾いた。どう遺伝があるものとしても、こうまで父の芸を継ぐことは困難なものであるがとだれも感動を隠せずにいた。支那から伝わった弾き方をする楽器はかえって学びやすいが、和琴はただ清掻きだけで他の楽器を統制していくものであるからむずかしい芸で、そしてまたおもしろいものなのである。右衛門督の爪音はよく響いた。一つのほうの和琴は父の大臣が絃もゆるく、柱も低くおろして、余韻を重くして、弾いていた。子息のははなやかに音がたつて、甘美な愛嬌があると聞こえた。これほど上手であるという評判はなかったのである。がと親王がたも驚いておいでになった。琴は兵部卿の宮があそばされた。この琴は宮中の宜陽殿に納めておかれた御物であつて、どの時代にも第一の名のあつた楽器であつたが、故院の御代の末ごろに御長皇女の一品の宮が琴を好んでお弾きになったので御下賜あそばされたのを、今日の賀宴のために太政大臣が拝借してきたのである。この楽器によつて御父帝の御時のこと、また御姉宮に賜つた時のことが思召されて六条院はことさら身に沁んで音色に聞き入つておいでになった。兵部卿の宮も酔い泣きがとめられない御様子であつた。そして院の御意をお伺いになった上琴を御前へ移された。今夜の御気分からお辞みになることはできずに院は珍しい曲を一つだけお弾きになった。そんな

こともあつて大がかりな演奏ではないがおもしろい音楽の夜になったのである。階段きざはしの所に声のよい若い殿上人たちの集められたのが、器楽のあとを歌曲に受け、「青柳」の歌われたころはもう時ときに帰っていた鶯うぐいすも驚くほど派手はでなものになった。主催する人は別にあつた宴会ではあるが、院のほうでも纏頭の御用意があつて出された。

夜明けに尚侍は自邸へ帰るのであつた。院からのお贈り物があつた。

「私はもう世の中から離れた気にもなつて、勝手な生活をしていますから、たつて行く月日もわからないのだが、こんなに年を数えてきてくださったことで、老いが急に来たような心細さが感ぜられます。おりおりはどんな老人になつたかとその時その時を見比べに来てください。老人でいながら自由に行動のできない窮屈な身の上ということにもかくもなっているのですから、自分の思うとおりに御訪問などができず、お目にかかる機会の少ないのを残念に思います」

などと院はお言いになつて、身にしむことも、恋しい日のこともお思いにならないのではないのに、玉鬘たまかづらがたまたま来ても早く去つて行こうとするのを物足らず思召すようであつた。玉鬘の尚侍も実父には肉親としての愛は持っているが、院のこまやかだつた御愛情に対しては、年月に添つて感謝の心が深くなるばかりであつた。今日の境遇の得

られたのも院の恩恵であると思っていた。

二月の十幾日に朱雀院すざくの女三にょさんの宮みやは六条院へおはいりになるのであった。六条院でもその準備がされて、若菜の賀に使用された寝殿の西の離れに帳台を立て、そこに属した一二の対の屋、渡殿わたどのへかけて女房の部屋へやも割り当てた華麗な設けができていた。宮中へはいる人の形式が取られて、朱雀院からお道具類は運び込まれた。その夜の儀装の列ははなやかなものであった。供奉者ぐぶには高官も多数に混じっていた。姫宮を主公として結婚をしたいと望んだ大納言も失敗した恨みの涙を飲みながらお付きして来た。お車の寄せられた所へ六条院が出てお行きになって、宮をお抱きおろしになったことなどは新例であった。天子でおいでになるのではないから入内じゅだいの式とも違い、親王夫人の入興にゅうよとも違ったものである。

三日の間は御舅しゅうとの院のほうからも、また主人の院からも派手はでな伺候者へのおもてなしがあった。紫の女王にょおうもこうした雰囲気ふんいきの中には寂しい気のすることであろうと思われた。夫人は静かにながめていながらも、院との間柄が不安なものになるうとは思わないのであるが、だれよりも愛される妻として動きのない地位をこれまで持った人も、若くて将来の長い内親王が競争者におなりになったのであるから、次第に自分が自分をは

ずかしめていく気がしないでもない心を、おさえて、おおように姫宮の移っておいでになる前の仕度したくなども院とごいっしょになってしたような可憐かれんな態度に院は感激しておいでになった。女三の宮はかねて話のあったようにまだきわめて小さくて、幼い人といってもあまりにまでお子供らしいのである。紫の女王を二条の院へお迎えになった時と院は思い比べて御覧になっても、その時の女王は才気が見えて、相手にしておもしろい少女おとめであつたのに、これは単に子供らしいというのに尽きる方であつたから、これもいいであろう、自尊心の多過ぎず出過ぎたことのできない点だけが安心であると、院はつとめて善意で見ようとされながらも、あまりに言いがない新婦であるとお歎なげかれになった。

三日の間は続いてそちらへおいでになるのを、今日までそうしたことに馴なれぬ女王であつたから、忍ぼうとしても底から底から寂しさばかりが湧わいてきた。新婚時代の新郎の衣服として宮のほうへおいでになる院のお召し物へ女房に命じて薰香たきものをたきしめさせながら、自身は物思いにとらわれている様子が非常に美しく感ぜられた。何事があつても自分はもう一人の妻を持つべきではなかつたのである。この問題だけを謝絶しきれずに締まりがなく受け入れた自分の弱さからこんな悲しい思いをすることにもなつたと、

院は御自身の心が恨めしくばかりおなりになって、涙ぐんで、

「もう一晩だけは世間並みの義理を私に立てさせてやると思つて、行くのを許してください。今日からあとに続けてあちらへばかり行くようなことをする私であつたなら、私自身がまず自身を軽蔑するでしょうね。しかしまた院がどうお思いになることだから」

と、お言いになりながら煩悶はんもんをされる様子がお気の毒であつた。夫人は少し微笑をして、

「それ御覧なさいませ。御自身のお心だつてお決まりにならないのでしょうか。ですもの、道理のあるのが強味ともいつておられませんわ」

絶望的にこう女王に言われては、恥ずかしくさえ院はお思われになつて、頬杖ほおづえを突きながらうつとりと横になつておいでになつた。紫の女王は硯すずりを引き寄せて無駄むだ書きを始めていた。

目に近くうつれば変はる世の中を行く末遠く頼みけるかな

と書き、またそうした意味の古歌なども書かれていく紙を、院は手に取つてお読みに

なり夫人の気持ちをお憐あわれみになった。

命こそ絶ゆとも絶えめ定めなき世の常ならぬ中の契りを

こんな歌を書いて、急に立つて行こうともされないのを見て、夫人が、

「おそくなつては済みませんことですよ」

と催促したのを機会に、柔らかな直衣のうしの、艶えんに薰香たきものの香をしましたものに着かえて院
が
出
て
お
行
き
に
な
る
の
を
見
て
い
る
女
王
の
心
は
平
静
で
あ
り
え
ま
い
と
思
わ
れ
た
。
こ
れ
ま
で
に
さ
ら
に
新
婦
を
得
よ
う
と
さ
れ
る
ら
し
い
気
ぶ
り
は
あ
つ
て
も
、
い
い
よ
こ
と
が
進
行
し
そ
う
な
時
に
反
省
し
て
お
し
ま
い
に
な
る
院
で
お
あ
り
に
な
つ
た
か
ら
、
た
だ
も
う
何
で
も
な
く
順
調
に
幸
福
が
続
い
て
い
く
と
ば
か
り
信
じ
て
い
た
末
に
、
世
間
の
も
の
に
も
自
分
の
位
置
を
あ
や
ぶ
ま
せ
る
よ
う
な
こ
と
が
湧わい
て
き
た
。
永
久
に
不
変
な
も
の
な
ど
は
な
い
こ
う
し
た
こ
の
世
で
は
ま
た
ど
ん
な
運
命
に
自
分
は
遭
遇
す
る
か
も
し
れ
な
い
と
女
王
は
思
う
よ
う
に
な
つ
た
。
表
面
に
こ
の
動
揺
し
た
気
持
ち
は
見
せ
な
い
の
で
あ
る
が
、
女
房
た
ち
も
、

「意外なことになるものですね。ほかの奥様がたはおいでになってもこちらの奥様の競

争者などという自信を持つ方もなくて、御遠慮をしていらつしやるから無事だったのですが、こんなふう^なにこの奥様をすら眼中にお置きあそばさないような方が出ていらつしてはどうなることでしょう。だれよりも優越性のある方に劣等者の役はお勤まりにはならないでしょう。そしてまたあちらから申せば、何でもないことに神経をおたかぶらせになるようなこともないとは言われませんから、そこで苦しい争闘が起こつて奥様は御苦労をなさるでしょうね」

などと語つて歎^{なげ}いているのであつたが、少しも氣にせぬふうで、機嫌^{きげん}よく夫人は皆と話を^なして夜がふけるまで座敷に出ていたが、女房たちの中にあるそうした空氣が外へ知れては醜いように思つて言つた。

「院には何人もの女性が侍しておられるのだけれど、理想的な御配偶とお認めになるはなやかな身分の人はないとお思ひになつて、物足らず思召していらつしやつたのだから、宮様がおいでになつてこれで完全になつたのよ。私はまだ子供の氣持ちがなくなつていないと見えて、いっしょに遊んで楽しく暮らしたくばかり思つているのに、皆が私の氣持ちを^{さんたく}忖度して面倒な關係にしてしまわないかと心配よ。自分と同じほどの人とか、もっと下の人とかには、あの人^なが自分より多く愛されることは不愉快だというよう

な気持ちは自然起るものだけれど、あちらは高貴な方で、お気の毒な事情でこうしておいでになったのだから、その方に悪くお思われしたくないと私は努めているのよ」

中将とか中務なかつかさとかいう女房は目を見合わせて、

「あまりに思いやりがあまりになり過ぎるようね」

ともひそかに言っていた。この人たちは若いころに院の御愛人であったが、須磨すまへおいでになった留守中から夫人付きになっていて、皆女王を愛していた。他の夫人の中には、どんなお気持ちかなさることでしょう、愛されない者のあきらめが平生からできている自分らとは違っておいでになったのであるからという意味の慰問をする人もあるのだ、女王はそんな同情をされることがかえって自分には苦痛になる。無常のこの世にいてそう夫婦愛に執着している自分でもないものと思っていた。あまりに長く寝ずにいるのも人が異様に思うであろうと我と心にとがめられて、帳台へはいると、女房は夜着を掛けてくれた。人から憐あわれまれているとおりに確かに自分は寂しい、自分の嘗なめているものは苦にがいほかの味のあるものではないと夫人は思ったが、須磨すまへ源氏の君の行ったところを思い出して遠くに隔たつていようとも同じ世界に生きておいでになることで心を慰めようとそのころはした、自分がどんなにみじめであるかは心で問題にせず源氏の君のせ

めて健在でいることだけを喜んだではないか、その時の悲しみがもとで源氏の君なり自分なりが死んでいたとしたら、それからのち今日までの幸福は享^うけられなかったのであるともまた思い直されもするのであった。外には風の吹いている夜の冷えて急には眠れない。近くに寝ている女房が寝返りの音を聞いて気をもむことがあるかもしれない。ことで、床の中でじつとしていたのもまた女王に苦しいことであつた。一番鶏^{どり}の声も身に沁^しんで聞かれた。恨んでばかりいるのでもなかったが、夫人のこんなに苦しんでいたことのあちらへ通じたのか、院は夫人の夢を御覧になった。目がさめて胸騒ぎのあそばされる院は鶏の鳴くのを聞いておいでになって、その声が終わるとすぐに宮の御殿をお出になるのであつたが、お若い宮であるために乳母たちが近くにやすんでいて、その人たちが院の妻戸をあけて外へ出られるのをお見送りのした。夜明け前のしばらくだけことさらに暗くなる時間で、わずかな雪の光で院のお姿がその人たちに見えるのである。院のお服から発散された香気がまだあとに濃く漂っているのに乳母たちは気づいて「春の夜の闇^{やみ}はあやなし梅の花」などとも古歌が思わず口^{くち}に上りもした。院は所々にたまつた雪の色も砂子の白さと差別のつきにくい庭をながめながら対のほうへ向いてお歩きになりながらなお「残れる雪」と口ずさんでおいでになった。対の格子をおたたきになった

が、久しく夜明けの帰りなどをあそばされなかったのであったから、女房たちはくやし
い気になってしばらく寝入ったふうをしていてやつとあとに格子をお上げした。

「長く外に待たされて、身体が冷え通る気がしたのも、それは私の心が済まぬとあなた
を恐れる内部のせいで、女房に罪はなかったのかもしれない」

と、院はお言いになりながら、夫人の夜着を引きあけて御覧になると、少し涙で濡れ
ている下の単衣の袖を隠そうとする様子が美しく心へお受け取られになった。しかも打
ち解けぬものが夫人の心にあつて品よく艶な趣なのである。最高の貴女といつても完全
にものとのとわぬ憾みがあるのにと院は新婦の宮と紫の女王を心にくらべておいでに
なった。二人が来た道を振り返ってお話しになりながら、恨みの解けぬふうな夫人をな
だめて翌日はずつとそばを離れずにおいでになったあとでは、夜になつても宮のほうへ
お行きになれずに手紙だけをお送りになった。

今晩の雪に健康をそこねて苦しい氣がしますから、氣楽な所で養生をしようと思いま
す。

というのであつた。乳母の、

「そのとおりに申し上げました」

という言葉を使いが聞いて来た。平凡な返事であると院はお思いになった。朱雀院すざくがどうお思いになるかということが気がかりであるから、当分はあちらを立てるようになしておきたいと院はお思いになつても、実行に伴う苦痛が堪えがたく、なんということであらうと悲しんでおいでになった。夫人も、

「あちらへ御同情心の欠けたことでございますよ」

と言いつつ自分の立場を苦しんでいた。次の日はこれまでのとおりに自室でお目ざめになつて、宮の御殿へ手紙をお書きになるのであつた。晴れがましくは少しもお思いにならぬ相手ではあつたが、筆を選んで白い紙へ、

中道を隔つるほどはなけれども心乱るる今朝けさのあは雪

と書いて、梅の枝へお付けになつた。侍をお呼びになつて、

「西の渡殿のほうから参つて差し上げるように」

とお命じになつた。そして院はそのまま縁に近い座敷で庭をながめておいでになつた。白い服をお召しになつて、梅の枝の残りを手にまさぐつておいでになるのである。

仲間を待つ雪がほのかに白く残っている上に新しい雪も散っていた。若やかな声で鶯が近いところの紅梅の梢で鳴くのがお耳にはいつて、「袖こそ匂へ」（折りつれば袖こそ匂へ梅の花ありとやここに鶯ぞ啼く）と口ずさんで、花をお持ちになった手を袖に引き入れながら、御簾を掲げて外を見ておいでになる姿は、ゆめにも院などという御位の方とは見えぬ若々しさである。寝殿から来るお返事が手間どるふうであつたから、院は居室のほうへおいでになつて夫人に梅の花をお見せになつた。

「花であればこれだけの香気を持ちたいものですね。桜の花にこの香があればその他の花は皆捨ててしまふでしょうね。こればかりがよくなつて」

「この花もただ今でこそ唯一の花で、梅はよいものだと思われるのですよ。春の百花の盛りにほかのものと比較したらどうでしょうかしら」

などと夫人が言っている時に、宮のお返事が来た。紅い薄様に包まれたお文が目につつので院ははつとお思ひになつた。幼稚な宮の手跡は当分女王に隠しておきたい。この人に隔て心はないがさげすむ思ひをさせることがあつては宮の身分に対して濟まないと院はお思ひになるのであるが、隠しておしまひになることも夫人の不快がることであるからと、半分は見せてもよいというようにお拡げになつた文を、女王は横目に見なが

ら横たわっていた。

はかなくて上の空にぞ消えぬべき風に漂ふ春のあは雪

文字は実際幼稚なふうであつた。十五にもおなりになればこんなものではないはずであるがと目にとまらぬことでもなかったが、見ぬふりをしてしまった。他の女性のことであれば批評的な言葉も院は口にせられたであろうが御身分に敬意をお払いになって、「あなたは安心していてよいとお思いなさいよ」

とだけ夫人に言っておいでになった。

今日は昼間に宮のほうへおいでになった。特にきれいに化粧をお施しになった院のお美しさに、この日はじめて近づいた女房は興奮していた。老いた女房などの中には、なんととっても幸福な奥様はあちらのお一方だけで、宮は御不快な目にもおあいになるのであると、こんなことを思う者もあつた。姫宮は可憐で、たいそうなお居間の装飾などとは調和のとれぬ何でもない無邪気な少女で、お召し物の中にうずもれておしまいになったような小柄な姿を持つておいでになるのである。格別恥ずかしがってもおいでに

ならない。人見知りをせぬ子供のようにであつかいやすい氣を院はお覚えになった。朱雀すざく院は重い学問のほうは奥を究きわめておいでになると言われておいでにならないが、芸術的な趣味の豊かな方としてすぐれておいでになりながら、どうして御愛子をこう凡庸に思われるまでの女にお育てになったかと院は残念な氣もあそばされたのであるが、御愛情が起おここらないのでもなかった。院のお言いになるままになつてなよなよとおとなしい。お返辞なども習つておありになることだけは子供らしく皆言つておしまいになつて、自発的には何もおできにならぬらしい。昔の自分であれば厭いや氣のさしてしまふ相手であるうが、今日になつては完全なものは求めても得がたい、足らぬところを心で補つて平凡なものに満足すべきであるという教訓を、多くの経験から得てしまつた自分であるから、これをすら妻の一人と見ることができる。第三者は自分のことを好適な配偶を得たと見ることであらうとお考えになると、離れる日もなく見ておいでになつた紫の女王にやわうの価値が今になつてよくおわかりになる氣がされて、御自身のお与えになつた教育の成功したことをお認めにならずにはおられなかった。ただ一夜別れておいでになる翌朝の心はその人の恋しさに満たされ、しばらくして逢いうる時間がもどかしく思われになつて、院の愛はその人へばかり傾いていった。なぜこんなにまで思うのであらうかと院は

御自身をお疑いになるほどであつた。

朱雀院はそのうちに御寺^{みでら}へお移りになるのであつて、このころは御親心のこもつたお手紙をたびたび六条院へつかわされた。姫宮のことをお頼みになるお言葉とともに、自分がどう思ふかと心にお置きになるようなことはないようにして、ともかくもお心にかけていくださればよいという意味の仰せがあるのであつた。そうは仰せられながらも御幼稚な宮がお氣がかりでならぬ御様子が見えるお文^{ふみ}であつた。紫夫人へもお手紙があつた。

幼い娘が、何を理解することもまだできぬままでそちらへ行つておりますが、邪氣のないものとしてお許しになつてお世話をおやきください。あなたには縁故がないわけでもないのですから。

そむきにしこの世に残る心こそ入る山みちの絆^{ほどし}なりけれ

親の心の闇^{やみ}を隠そうともしませんでこの手紙を差し上げるのはばかり多く思われま
す。

というのであった。院も御覧になつて、

「御同情すべきお手紙ですから、あなたからも丁寧にお返事を書いておあげなさい」

こうお言いになつて、そのお使いへは女房を出して酒をお勧めになつた。

「どう書いてよろしいのかわかりません。お返事がいたしにくうございます」

と女王は言つていたが、言葉を飾る必要のある場合のお返事でもなかつたから、ただ感じただけを、

そむく世のうしろめたくばさがたき絆ほだしを強しひてかけなはなれそ

こんな歌にして書いた。女の装束に細長衣ほそながを添えた纏頭てんとうをお使いへ出した。女王の書いたお返事の字のりっぱであるのを院は御覧になつて、こんなにも物事の整つた夫人もある六条院へ、一人の夫人となつて幼稚な姫宮が行つておられることを心苦しく思召した。

御出家の際に悲しがつた女御にょご、更衣こういは院が御寺みでらへお移りになることによつて、いよいよ散り散りにそれぞれの自邸へ帰るのであったが気の毒な人ばかりであつた。尚侍なしのかみはお

崩れ^かになった皇太后がお住みになった二条の宮へはいつて住むことになった。姫宮を心
がかりに思召されたのに次いでは尚侍のことを院の帝は顧みがちにされた。

尼になりたい希望を前尚侍は持っていたが、この際それを実行するのは、人を慕つて
出家をすることで、悟った人のすることでない^と院は御忠告をあそばして、ひたすら御
自身の御寺の仏像の製作を急がせておいでになった。

六条院はこの朧^{おぼろづきよ}月夜の^も前尚侍と飽かぬ別れをあそばされたまま、今もその時に続いて
長い恋をしておいでになり、どんな機会にまた逢^あうことができよう、今一度は逢つて、
その時の血のにじむほど苦しかった心をその人に告げたいと思召されるのであつたが、
双方とも世間の評のはばかられる身の上でもおありになつて、女のためにも重い傷手^{いたで}を
負わせたあの騒動^{すざく}をお思ひになると、積極的な御行動は取れないで院は忍んでおいでに
なつたのであるが、朱雀院^{すざく}ともお別れして閑散な独身生活にはいつているそのこと自身
がお心を惹^ひいて、お逢いになりたくてならないのであつた。あるまじいこととお思ひ
になりながら、ただ友情による手紙と見せて、忘れえぬ熱情をお洩^もらしになることがた
びたびになった。もう青春の男女のように、危険がる必要もないと思つては時々お返事
も前尚侍は出した。昔に増してあらゆる点の完成されつつある跡の見える朧月夜の君の

手紙がいつそうの魅力になって、昔の中納言の君の所へも、二人の逢う道を開かせようとする手紙を院は常に書いておいでになった。その女の兄である前和泉守いずみのかみをお呼び寄せになつては、若い日へお歸りになつたような相談をされた。

「取り次ぎをもつて話をするようなことでなく、そして直接といつても物越しでいいのだが話さねばならぬ用が私にあるのだ。尚侍の承諾を得るようにしてくれれば、私はそつと訪ねて行く。今はもう絶対にそんなこともできない身の上になつてゐる私が、そうしようと思うのだから、あちらでも秘密にしていただけだろうと安心はしている」

そのお話を中納言の君から聞いた時に、尚侍は、

「それは必要のない会見よ。私はもうあの時のような幼稚な心で人生を見ていない。昔から真実の欠けた愛しか私には持つてくださらなかった方の御誘惑などに今さらかからない。お気の毒な御生活に法皇様をお置きして、あの方とする昔の話など私にはない。お言葉どおり秘密にはするとしても私自身の心に恥ずかしいことではないか」

と歎息たんそくして、なおそういうことは思いもよらぬことであるというお返事ばかりをしてゐた。すべてのものを無視して、苦しい中で愛し合つた二人ではないか、出家をあそばされた院に対してやましいことではあるが、かつてなかつたことではない関係なのだけ

ら、今になつて清浄がつても昔の浮き名をあの人が取り返すことはできないのだと、この院はお思ひになつて、にわかにかこの和泉守を案内役として朧月夜の尚侍の二条の宮を訪ねる決心を院はあそばされたのであつた。夫人の女王へは、

「東の院にいる常陸ひたちの宮の女王がずっと病氣をしておられるのですが、ここの取り込みひきこみに紛れて見舞つてあげなかつたのがかわいそうなのだが、昼間は人目に立つてよろしくないから夜になつてから出かけてみようと思います。だれにも知らせないことだからそのつもりにしておくですよ」

と、お言ひになつて、院は外出の化粧におかかりになつたが、ただ事とは思われなかつた。平生はそんなにしてお行きになる所ではないのであるから夫人は不審をいだいたが、思ひ合あひあひわされることもないではないのを、女三にようさんの宮がおいでになつてからは、以前のように思うことをすぐに言う習慣も女王は改めていて、素知らぬふうを作つていたのであつた。

この日は寢殿へもお行きにならないでただ手紙をお書きかわしになつただけである。熱心たきものに薫香そでの香を袖につけて、院は日の暮れるのを待つておいでになつた。そしてきわめて親しい人を四、五人だけおつれになり、昔の微行しのびあるきに用いられた簡単な網代車あじろぐるまでお出

かけになった。

六条院のおいでになったことが伝えられると、

「どうしてでしょう。私のお返事をどう聞き違えて申し上げたのだろう」

尚侍は機嫌きげんを悪くしたが、

「いいかげんな口実を作りましてお帰しいたすことなどはもったいないことでございましょう」

と中納言の君は言つて、無理な計らいまでして院を座敷へ御案内してしまった。院は見舞いの挨拶あいさつなどをお取り次がせになったあとで、

「ただここに近い所へまで出てくだすつて、物越しでもお話しくださいませんか。今日はもう昔のような不都合なことをする心を持っていませんから」

こう切に仰せられるので、尚侍はひどく歎息たんそくをしながら膝行いざつて出た。だからこの人は軽率なのであると、満足を感じながらも院は批評をしておいでになった。これは二人にとって絶えて久しい場面であった。遠い世の思い出が女の心によみがえらないことでもないのである。東の対であった。東南の端の座敷に院はおいでになって、隣室の尚侍のいる所との間の楔子からかみには懸金かねがねがしてあった。

「何だか若者としての御待遇を受けているようで、これでは心が落ち着かないではありませんか。あれからどれだけの年月、日は幾つたつということまでも忘れない私としては、あなたのこの冷たさが恨めしく思われてなりませんよ」

と、院はお恨みになった。夜はふけにふけてゆく。池の鴛鴦おしどりの声などが哀れに聞こえて、しめっぽく人けの少ない宮の中の空気が身にお感じられになり、人生はこんなに早く変わってしまうものかと昔の栄華の跡の邸やしながお思われになると、女の心を動かそうとして嘘泣きうそをした平仲へいちゆうではなくて真実の涙のこぼれるのをお覚えになった。昔に変わってあせらず老成なふうに恋を説きながら、

「これはいつまでもこのままにしておくことになるのですか」
と言つて、襖子を引き動かしたまうのであつた。

年月を中に隔てて逢坂あふさかのさもせきがたく落つる涙か

院がこうお言いになつても、

涙のみせきとめがたき清水しみづにて行き逢ふ道は早く絶えにき

というようなかき離れた返辞を女はするにすぎなかったが、昔を思つてはだれが原因になつてこの方は遠い国に漂泊さすらつておいでになつたか、一人で罪をお負になつたこの方に、冷たい賢がつた女にだけなつて逢つていて済むだろうかと臘月夜おぼろづきよの尚侍なうじの心は弱く傾いていった。もともとから重厚な所の少ない性質のこの人は、源氏の君から離れていた年月の間昔の軽率を後悔していたし、清算のできた氣にもなつていたのであるが、昔のとおりなような夜が眼前に現われてきて、その時と今の間にあつた時がにわかに短縮された氣のするままに、初めの態度は取り続けられなくなつた。

やはり最も艶えんな貴女きじよとしてなお若やかな尚侍を院は御覧になることができたのであつた。世に對し、人に對してはばかり煩悶はんもんが見えて歎息たんそくをしがちな尚侍を、今初めて得た恋人よりも珍しくお思ひになり、海のような愛の湧わくのを院はお覺えになつた。夜の明けていくのが惜しまれて院は歸つて行く氣が起こらない。朝ぼらけの艶な空からは小鳥の声がうららかに聞こえてきた。花は皆散つた春の暮れで、浅緑にかすんだ庭の木立ちをおながめになつて、この家で昔藤花とうかの宴があつたのはちようどこのころのことであつ

たと院はみずからお言いになったことから、昔と今の間の長いことも考えられ、青春の
日が恋しく、現在のことが身に沁しんでお思われになった。中納言の君がお見送りをする
ために妻戸をあけてすわっている所へ、いったん外へおいでになった院が帰って来られ
て、

「この藤ふじと私は深い因縁のある気がする。どんなにこの花は私の心を惹ひくか知っていま
すか。私はここを去って行くことができないよ」

こうお私語せきごになったままで、なお花をながめて立ち去ろうとはなされないものであつ
た。山から出た日のはなやかな光が院のお姿にさして目もくらむほど美しい。この昔
にもまさった御風采ごふうさいを長く見るこのでしなかつた尚侍が見て、心の動いていかないわ
けはないのである。過失のあつたあとでは後宮に侍してはいても、表だつた后きさきの位には
上れない運命を負つた自分のために、姉君の皇太后はどんなに御苦勞をなすつたこと
か、あの事件を起こして永久にぬぐえない悪名までも取るにいたつた因縁の深い源氏の
君であるなども尚侍は思っていた。名残なごりの尽きぬ会見はこれきりのことにさせたくな
いことではあるが、今日の六条院が恋しのびの微行あるきなどを書いて軽々しくあそばされるもので
もないと思われた。院はこの邸やしきにおける人目も恐ろしく思召おぼしめされたし、日が昇のぼつていく

のにせきたてられるお気持ちも覚えておいでになった。廊の戸口の下へ車が着けられて、供の人たちもひそかなお促し声もたてた。院は庭にいた者に長くしだれた藤の花を一枝お折らせになった。

沈みしも忘れぬものを懲りずまに身も投げつべき宿の藤波

と歌いながら院はお悩ましいふうで戸口によりかかっておいでになるのを、中納言の君はお気の毒に思っていた。尚侍は再び作られた関係を恥じて思い乱れているのであったが、やはり恋しく思う心はどうすることもできないのである。

身を投げん淵ふちもまことの淵ならで懸かけじやさらに懲りずまの波

と女は言った。青年がするような行動を院は御自身も肯定できなくお思いになるのであるが、女の情熱の冷却してはいないことがうれしくて、またの会合を遂げうるようによく語っておゆきになった。昔も多くのの中のすぐれた志で愛しておいになりながら、

やむなくお別れになった仲に、この一夜があつたあとのお心はその人へ強くお惹かれに
ならぬわけもない。

院は非常に静かに忍んで自室へおはいりになった。こうした女の所からのお帰り姿を
見て、相手は尚侍あたりであろうと、夫人には想像されるのであつたが、氣のつかぬふ
うをしていた。かえつて妬みねたを表へ出すことよりもこれを院は苦しくお思いになつて、
なぜこうまで妻を冷淡にあつたのであらうと歎息がされ、以前にまさつた熱情を
もつて永久に変わらぬ愛を語らうとあそばされるのに言葉を尽くしておいになつた。
尚侍との間に復活させた情事は洩もらすべき性質のものではないのであるが、昔のことも
くわしく知っている女王にやおうであつたから、今度のことも眞実のことまではお言いにならな
かつたが、

「物越しでやつと逢つてもらつただけでは心が残つてならない。人目を上手じょうずに繕つても
う一度だけは逢いたい人だ」

とくらいにお話しになつた。女王は笑つて、

「お若返りにばかりなりますわね。昔を今にまた新しくお加えになつては、いよいよ私
の影は薄くばかりなります」

と言いながらも、涙ぐんだ目をしているのが可憐かれんであつた。

「いつもそんなふうに、寂しそうにばかりあなたがするから、私はたまらなく苦しくなる。もっと荒削りに、私を打つとか捻ひねるとかして懲らしてくれたらどうですか。あなたにそうした水くさい態度をとらせるようには暮らして来なかつたはずだが、妙にあなたは変わつてしまいましたね」

などとも言つて、機嫌きげんをお取りになるうちには前夜の真相も打ちあけて話しておしまひになることになった。姫宮のほうへお出かけにならずに、夫人をなだめるのに終日かかつておいでになった。それを宮は何ともお思ひにならないのであるが、乳母たちだけは不快がつていろいろと言つていた。嫉妬しつとをお持ちになる傾向が宮にもあれば院はまして苦しい立場になるのであるが、おっとりとした少女おとめの宮を、人形のように気楽にお扱ひになることはできるのであつた。

東宮へ上がつておいでになる桐壺きりつばの方は退出を長く東宮がお許しにならぬので、姫君時代の自由が恋しく思われる若い心にはこれを苦しくばかり思うのであつた。夏ごろになつては健康もすぐれなくなつたのであるが、なおも帰るお許しがないので困つていた。これは妊娠であつたのである。まだ十四、五の小さい人であつたから、この徴候を

見てだれもだれも危険がった。やつとのことでお許しが下がって帰邸することになった。女三の宮のおいになる寢殿の東側になった座敷のほうに桐壺の方の一時の住居すまいが設けられたのである。明石夫人あかしも共に六条院へ帰った。光る未来のある桐壺の方の身に添って進退する実母夫人は幸運に恵まれた人と見えた。紫夫人はそちらへ行つて桐壺の方に逢おうとして、

「このついでに中の戸を通りまして姫宮へ御挨拶あいさつをいたしましょう。前からそう思つていたのですが機会がなかったのですもの。わざわざ伺うのもきまりが悪かつたのですが、こんな時だと自然なことに見えていいと思います」

と院へ御相談をした。院は微笑をされながら、

「結構ですよ。まだ子供なのですから、よくいろんなことを教えておあげなさい」

と御同意をあそばされた。宮様よりも明石夫人という聡明な女そうめいに逢うことで夫人は晴れがましく思い、髪も洗い、粧よそおいに念を入れた女王の美はこれに準じてよい人もないであらうと思われた。

院は宮のほうへおいでになって、

「今日の夕方対のほうにいる人が淑景舎しげいしやを訪ねたずに来るついでにここへも来て、あなたと

御交際の道を開きたいように言っていましたから、お許しになって話してごらん下さい。善良な性質の人ですよ。まだ若々しくてあなたの遊び相手もできそうですよ」

とお語りになった。

「恥ずかしいでしょうね。どんなお話をすればいいのでしょうかね」

とおおように宮は言っておられる。

「人にする返辞は先方の話次第で出てくるものです。ただ好意を持ってお逢いにならないではいけませんよ」

院はこまごまと御注意をされた。院は御両妻の間が平和であるように祈っておいでになるのである。あまりにたあいのない子供らしさを紫の女王に発見されることは、御自身としても恥ずかしいことにお思になるのであるが、夫人が望んでいることをとめるのもよろしくないとお考えになったのである。

紫の女王は内親王である良人おっとの一人の妻の所へ伺候することになった自分を憐あわれんだ。

二十年同棲どうせいした自分より上の夫人は六条院にあつてはならないのであるが、少女時代から養われて来たために、自分は軽侮してよいものと見られて、良人は高貴な新妻をお迎えしたものであると思うと寂しかった。手習いに字を書く時も、棄婦の歌、閨怨けいえんの歌

が多く筆に上ることによって、自分はこうした物思いをしているのかとみずから驚く女王であつた。院は自室のほうへお歸りになつた。あちらで女三の宮、桐壺きりつぼの方などを御覧になつて、それぞれ異なつた美貌びぼうに目を樂ませておいでになつたあとで、始終見馴なれておいでになる夫人の美から受ける刺激は弱いはずで、それに比べてきわだつ感じをお受けになることもなからうと思われるが、なお第一の嬪妍せんけんたる美人はこれであると院はこの時驚歎きやうたんしておいでになつた。氣高けだかさ、貴女きじよらしさが十分備わつた上にはなやかで明るく愛嬌あいぎやうがあつて、艶えんな姿の盛りと見えた。去年より今年は美しく昨日より今日が珍しく見えて、飽くことも見て倦うむことも知らぬ人であつた。どうしてこんなに欠点なく生まれた人だろうかと院はお思いになつた。手習いに書いた紙を夫人が硯すずりの下へ隠したのを、院はお見つけになつて引き出してお読みになつた。字は専門家風に上手じようずなのではなく、貴女らしい美しさを多く含んだものである。

身に近く秋や来ぬらん見るままに青葉の山もうつろひにけり

と書かれてある所へ院のお目はとまつた。

水鳥の青羽は色も変はらぬを萩の下こそけしきことなれ

など横へ書き添えておいでになった。何かの場合ごとに今日の夫人の懊惱する心の端は見えても、さりげなくおさえている心持ちに院は感謝しておいでのなるのであった。今夜はどちらとも離れていてよい暇な時であったから、朧月夜の君の二条邸へ院は微行でお出かけになった。あるまじいことであるとお思い返しになろうとしても、おさえきれぬ気持ちがあつたのである。

東宮の淑景舍の方は実母よりも紫夫人を慕っていた。美しく成人した継娘を女王は真実の親に変わらぬ心で愛した。なつかしく語り合ったあとで中の戸をあけて、宮のお座敷へ行き、はじめて女三の宮に御面会した。ただ少女とお見えになるだけの宮様に女王は好感が持たれて、軽い気持ちにもなり年長の人らしく、保護者らしいふうにものを言つて、宮の母君と自身の血の続きを語ろうとして、中納言の乳母というのをそばへ呼んで言つた。

「さかのぼつて言いますとそうなのです。私の父の宮とお母様は御兄弟なのです。ですからもつたないことです。が親しく思召していただきたいと申し上げたかったです。」

が、機会がございませんでね。これからはお心安く思召して、私どもの住んでおりますほうへもお遊びにおいでくださいませ、気のつきませんことがございまして、御注意をいただけましたらうれしく存じます」

中納言の乳母が、

「お母様にもお死に別れになりますし、院の陛下は御出家をあそばしますし、お一人ぼっちのお心細い宮様ですから、御親切なお言葉をいただきますことは、この上なく幸福に思召すかと存ぜられます。法皇様も宮様があなた様を御信頼あそばして御保護の願えますようにとの思召しがおありあそばすらしく存じ上げました。私どももお言葉を承ってまいったのでございます」

などと言った。

「もったいないお手紙をあちらからくださいました時から、どうかしてお力にならなければと心がけてはいるのでございますが、何と申しても私が賢くなくて」

とあたたかい気持ちを女王は見せて、姉が年少の妹に対するふうで、宮のお気に入りそうな絵の話をしたり、雛遊ひなびはいつまでもやめられないものであるとかいうことを若やかに語っているのを、宮は御覧になって、院のお言葉のように、若々しい気立ての優

しい人であると少女らしいお心にお思いになり、打ち解けておしまいになった。

これ以来手紙が通うようになって、友情が二人の夫人の間に成長していった。書信で遊ぶ事もなされた。世間はこうした高貴な家庭の中のことを話題にしたがるもので、初めごろは、

「対の奥様はなんといつても以前ほどの御寵愛にあつていらなくなるであらう。少しは院の御情が薄らぐはずだ」

こんなふうにも言つたものであるが、実際は以前に増して院がお愛しになる様子の見えることで、またそれについて宮へ御同情を寄せるような口ぶりでなされる噂が伝えられたものであるが、こんなふうに寢殿の宮も対の夫人も睦まじくなられたのであるからもう問題にしようがないのであつた。

十月に紫夫人は院の四十の賀のために嵯峨の御堂で薬師仏の供養をすることになった。たいそうになることは院がとめておいでになったから、目だたせない準備をしたのであつた。それでも仏像、経箱、経巻の包みなどのりっぱさは極楽も想像されるばかりである。そうした最勝王経、金剛、般若、寿命経などの読まれる頼もしい賀の営みであつた。高官が多く参列した。御堂のあたりの嵯峨野の秋のながめの美しさに半分は心

が惹かれて集まった人なのであろうが、その日は霜枯れの野原を通る馬や車を無数に見ることができた。盛んな誦經の申し込みが各夫人からもあった。二十三日が仏事の最後の日で、六条院は狭いまでに夫人らが集まって住んでいるため、女王には自身だけの家のように思われる二条の院で賀の饗宴を開くことにしてあった。賀の席上で奉る院の衣服類をはじめとして当日用の仕度はすべて紫夫人の手でとのえられているのであったが、花散里夫人や、明石夫人なども分担したいと言い出して手つだいをした。二条の院の対の屋を今は女房らの部屋などにも使わせることにしていたのであるが、それを片づけて殿上役人、五位の官人、院付きの人々の接待所にあてた。寢殿の離れ座敷を式場にして、螺鈿の椅子を院の御ために設けてあった。西の座敷に衣裳の卓を十二置き、夏冬の服、夜着などの積まれたそれらの上を紫の綾で覆うてあるのも目に快かった。中の品物の見えないのも感じがいいのである。椅子の前には置き物の卓が二つあって、支那の羅の裾ぼかしの覆いがしてある。挿頭の台は沈の木の飾り脚の物で、蒔絵の金の鳥が銀の枝にとまっていた。これは東宮の桐壺の方が受け持ったので、明石夫人の手から調製させたものであるからきわめて高雅であった。御座の後ろの四つの屏風は式部卿の宮がお受け持ちになったもので、非常にりっぱなものだった。絵は例の四季の風景である

が、泉や滝の描き方に新しい味があった。北側の壁に添って置き棚が二つ据えられ、小物の並べてあることは定った形式である。南側の座敷に高官、左右の大臣、式部卿の宮をはじめとして親王がたのお席があった。舞台の左右に奏樂者の天幕ができ、庭の西と東には料理の箱詰めが八十、纏頭用の品のはいった唐櫃を四十並べてあった。午後二時に樂人たちが参入した。万歳樂、皇※などが舞われ、日の暮れ時に高麗樂の乱声があった。また続いて落蹲の舞われたのも目馴れず珍らしい見物であったが、終わりに近づいた時に、権中納言と、右衛門督が出て短い舞をしたあとで紅葉の中へはいって行つたのを陪觀者は興味深く思つた。昔の朱雀院の行幸に青海波が絶妙の技であつたのを覚えてゐる人たちは、源氏の君と当時の頭中將のようにこの若い二人の高官がすぐれた後継者として現われてきたことを言い、世間から尊敬されていることも、りっぱさも美しさも昔の二人の貴公子に劣らず、官位などはその時の父君たち以上にも進んでいることなどを年齢までも数えながら語つて、やはり前生の善果がある家の子息たちであると両家を祝福した。六条院も涙ぐまれるほど身にしむ追憶がおりになつた。夜になつて樂人たちの退散していく時に紫の夫人付きの家職の長が下役たちを従えて出て、纏頭品の箱から一つずつ出して皆へ頒つた。白い纏頭の服を皆が肩にかけて山ぎわから池の岸を通つ

て行くのをはるかに見ては鶴つるの列かと思われた。席上での音楽が始まっておもしろい夜の宴になった。楽器は東宮の御手から皆呈供されたのである。朱雀院すざくからお譲られになった琵琶びわ、帝みかどからお賜わりになった十三絃げんの琴などは六条院のためにお馴染なじみの深い音色を出して、何につけても昔の宮廷が思われになる方であつたから、またさまざまの恋しい昔の夢をお描かかせした。入道の宮がおいでになったなら四十の御賀も自分が主催して行なつたことであらう。今になつては何を志としてお見せすることができよう、すべて不可能なことになつたと院は御歎息たんそくをあそばした。女院をお失いになつたことは何の上にも添う特殊な光の消えたことであると帝も寂しく思召すのであつて、せめて六条院だけを最高の地位に据すえたいというお望みも実現されないことを始終残念に思召す帝であつたが、今年は四十の賀に託して六条院へ行幸みゆきをあそばされたい思召しであつた。しかしそれも冗費は国家のためお慎みになるようにと六条院からの御進言があつておできにならぬためにくやしう思召すばかりであつた。

十二月の二十日過ぎに中宮ちゅうぐうが宮中から退出しておいでになつて、六条院の四十歳の残りの日のための祈祷きとうに、奈良の七佛寺へ布四千反を頒わかつてお納めになつた。また京の四十寺へ絹四百疋びきを布施にあそばされた。養父の院の深い愛を受けながら、お報いするこ

とは何一つできなかった自分とともに、御父の前皇太子、母御息所みやすどころの感謝しておられる志も、せめてこの際に現わしたいと中宮は思召したのであるが、宮中からの賀の御沙汰ごさたを院が御辞退されたあとであったから、大仰になることは皆おやめになった。

「四十の賀というものは、先例を考えますと、それがあつたあとをなお長く生きていられる人は少ないのですから、今度は内輪のことにしてこの次の賀をしていただく場合にお志を受けましょう」

と六条院は言っておいでになったのであるが、やはりこれは半公式の賀宴で派手はでになった。六条院の中宮のお住居すまいの町の寝殿が式場になっていて、前にお受けになった幾つかの賀の式に変わらぬ行き届いた設けがされてあつた。高官への纏頭てんとうはお后きさきの大饗宴きやうえんの日の品々に準じて下された。親王がたには特に女の装束、非参議の四位、殿上役人などには白い細長衣ほそなが一領、それ以下へは巻いた絹を賜わつた。院のためにととのえられた御衣服は限りもなくみごとなもので、そのほかに国宝とされている石帯せきたい、御剣を奉らせたまうたのである。この二品などは宮の御父の前皇太子の御遺品で、歴史的なものだったから院のお喜びは深かつた。古い時代の名器、美術品が皆集まつたような賀宴になつたのであつた。昔の小説も贈り物することを最も善事のように書き立ててあるが、面

倒で筆者にはいちいち書けない。

帝は六条院へ好意をお見せになろうとした賀宴をやむをえず御中止になったかわりに、そのころ病気のため右大將を辞した人のあとへ、中納言をにわか**ばつてき**に抜擢しておすえになった。院もお礼の御挨拶を**あいさつ**をあそばされたが、それは、

「突然の御恩命はあまりに過分なお取り扱いで、若い彼が職に堪えますかどうか疑問にいたしております」

こんな謙遜な**けんそん**お言葉であつた。

帝は**みかど**この右大將を表面の主催者として院の四十の賀の最後の宴を北東の町の花散里夫**はなちるさと**人の住居に設けられた。派手**はで**になることを院は避けようとされたのであつたが、宮中の御内命によって行なわれるこの賀宴は、すべて正式どおりに略したところのないすばらしいものになった。幾つかの宴席の料理の仕度**したく**などは内廷からされた。屯食**とんじき**の用意などはお指図**さしず**を受けて頭中將**とうちゅう**が皆したのである。親王**いづかた**お五方、左右の大臣、大納言二人、中納言三人、参議五人、これだけが参列して、御所の殿上役人、東宮、院の殿上人もほとんど皆集まって参っていた。院のお席の物、その室に備えられた道具類は太政大臣が聖旨を奉じて最高の技術者に製作させた物であつた、そしてお言葉を受けてこの大臣もお

式の場合へ臨んだ。院はこれにもお驚きになつて恐縮の意を表されながら式の座へお着きになった。中央の室に南面された院のお席に向き合つて太政大臣の座があつた。きれいで、りつぱによく肥ふとつていて、位人臣をきわめた貫禄かんろくの見える男盛りと見えた。院はまだ若い源氏の君とお見えになるのであつた。四つの屏風びやうぶには帝の御筆蹟ひつせきが貼はられてあつた。薄地の支那綾しなあやに高雅な下絵のあるものである。四季の彩色絵よりもこのお屏風はりつぱに見えた。帝の御字は輝くばかりおみごとで、目もくらむかと思ひなしも添つて思われた。置き物の台、弾ひき物、吹き物の楽器は藏人所くらんじんから給せられたのである。右大將の勢力も強大になつていたため今日の式のはなやかさはすぐれたものと思われた。四匹の馬が左馬寮、右馬寮、六衛府りくえふの官人らによつて次々に引かれて出た。おそれ多いお贈り物である。そのうち夜になつた。例の万歳楽、賀皇恩がこうおんなどという舞を、形式的にだけ舞わせたあとで、お座敷の音楽のおもしろい場が開かれた。太政大臣という音楽の達者たてものが臨場りんぱうしていることにだれもだれも興奮しているのである。琵琶びわは例によつて兵部卿ひょうぶきやうの宮、院は琴きん、太政大臣は和琴わじんであつた。久しくお聞きにならぬせいか和琴の調べを絶妙のものとしてお聞きになる院は、御自身も琴を熱心にお弾ひきあそばされたのである。いかなる時にも聞きえなかつた妙音も出た。またも昔の話が出て、子息の縁組みそ

他のことで昔に増した濃い親戚しんせき關係を持つことにおなりになった二人は、睦むまじく酒杯をお重ねになった。おもしろさも頂天に達した氣がされて、酔い泣きをされるものもこのかたがたであつた。お贈り物には、すぐれた名器の和琴を一つ、それに大臣の好む高麗まづえ笛を添え、また紫檀したんの箱一つには唐本と日本の草書の書かれた本などを入れて、院は歸ろうとする大臣の車へお積ませになった。馬を院方の人が受け取つた時に右馬寮の人々は高麗樂を奏した。六衛府の官人たちへの纏頭てんとうは大将が出した。質素に質素にとして目だつことはおやめになったのであるが、宮中、東宮、朱雀院すざく、后の宮きさき、このかたがたとの關係が深く、自然にはなやかさの作られる六条院は、こんな際に最も光る家と見えた。院には大将だけがお一人息子で、ほかに男子のないことは寂しい氣もされることであつたが、その一人の子が万人にすぐれた器量を持ち、君主の御覚えがめでたく、幸運の人というにほかならぬことが証あかしされていくにつけて、この人の母である夫人と、伊勢いせの御息所みやすどころとの双方の自尊心が強く苦しく競い合つた時代に次いで、中宮とこの大将が双方とも、院の大きい愛のもとでりっぱなかたがたになれたことが思わせられる。この日大将から院へ奉つた衣服類は花散里夫人が引き受けて作つたのである。纏頭の物は皆三条の若夫人の手でできたようであつた。六条院のはなやかな催し事もよそ

のことに聞いていた花散里夫人には、こうした生きがいのある働きをする日はあることかと思われたものであるが、大将の母儀ぼぎになつてゐることによつて光榮が分かれたのである。

新年になつた。六条院では淑景舎しげいしやの方かたの産期が近づいたために不斷の読経どきようが元日から始められていた。諸社、諸寺でも数知れぬ祈禱きとうをさせておいでになるのである。院は昔の葵夫人あおいが出産のあとで死んだことで懲りておいでになつて、恐ろしいものと子を産むことを感じておいでになり、紫夫人に出産のなかつたことは物足らぬお気持ちもしながらまたうれしく思われにもなるのであつたから、まだ少女といつてよいほどの身体からだで、その女の大厄たいやくを突破せねばならぬ御女おんむすめのことを、早くから御心配になつていたが、二月ごろからは寝ついてしまふほどにも苦しくなつたふうであるのを院も女王にやおうも不安がられないはずもない。陰陽師おんようじどもは場所を変えて謹慎をせねばならぬと進言するので、院外の離れた家へ移すのは気がかりに思召され、明石夫人あかしの北の町の一つの対の屋へ淑景舎の病室は移されることになつた。こちらはただ大きい対の屋が二つと、そのほかは廊めくにして廻らせた座敷ばかりの建物であつたから、廊座敷に祈禱の壇が幾つも築かれ、評判のよい祈祷僧は皆集められて祈つていた。明石夫人は桐壺きりつばの方が平らかに出産され

るか否かで自身の運命も決まることと信じていて、一所懸命な看護をしていた。明石入道の尼夫人はもうぼけた老婆になっていくはずである。姫君に接近のできることを夢のような幸福と思つて、移つて間もなくこの人がそばへ出てくるようになった。もう幾年か明石夫人は姫君に付き添つていたのであるが、桐壺の方の生まれてきた当時の事情などはまだ正確に話してなかった。それを老尼はうれしさのあまりに病室へ来ては涙まじりに、昔の話を身じまいをしながら姫君へ語るのであつた。初めの間は無気味な老婆である。姫君は思つて、顔ばかり見つめているのを常としたが、実母にそうした母親があるということは何かの時に聞いたこともあつたのを思い出してからは好意を持つようになった。明石で生まれた時のこと、また院がその海岸へ移つて来ておいでになつたころの様子などを尼君は言う、

「京へお帰りになりました時、一家の者はこれで御縁が切れてしまうのかとひどく悲しんだものでございますがね、お生まれになつたお姫様が暗い運命から私たちを救い上げてくださったのでございますから、ありがたいことと御恩を思つております」

はらはらと涙をこぼしている。そんな哀れな昔の話をこの尼さんが聞かせてくれなければ、自分はただ疑つてみるだけで、真相は何もわからずにしまったかもしれぬと思つ

て桐壺の方は泣いた。心のうちでは、自分の身の上は決して欠け目ないものとは言えなかったのを、養母の夫人の愛にみがかれて十分な尊敬も受ける院の御女おんむすめともなりえたのである、思ひ上がった心で東宮の後宮に侍していても、他の人たちを自分に劣ったもののように見たりしてきたのは過失あやまりである、表面に出して言わないでも、世間の人は自分のその態度を譏そしったことであろうと反省もされるようになった。実母は少し劣った家の出であるとは知っていても、生まれたのはそうした遠い田舎いなかの家であつたなどとは思ひも寄らぬことだったのである。おおように育てられ過ぎたせいだったかもしれないが、自身の今まで知らぬとは不思議なことのようと思われるのであつた。祖父である入道が現在では人間離れのした仙人せんじんのような生活をしているということも若い心には悲しかった。姫君がにわかにいろいろな物思ひを胸に持つて、寂しい顔をしている時に明石夫人が出て来た。昼の加持にあちらこちらから手つだいの者や僧が来て騒いでいるのを、この人は今まで監督していたのであるが、来てみると姫君のそばには他の者がいずに尼君だけが得意な気分を見せて近くにすわっていた。

「体裁が悪うございますよ。短い几帳きちようで身体からだをお隠しになつてお付きしていられ

ばいいのに、風が吹いていますからお座敷の外から人がのぞけば、あなたはお医者によ

うな恰好かっこうでおそばに出ているのですから恥かたじけなくずかしい。こんなふうにしておいでになつてはね」

などと明石は片腹痛がつていた。品のよいとりなしでこうしているのであると尼君自身は信じているのであるが、もう耳もあまり聞こえなくて、娘の言葉も、

「ああよろしいよ」

などと言つていいかげんに聞いているのである。六十五、六である。しゃんとした尼姿で上品ではあるが、目を赤く泣きはらしているのを見ては、古い時代、つまり源氏の君の明石の浜を去ったところによくこうであつたことが思い出されて夫人ははつとした。

「間違いの多い昔話などを申していたでしょう。怪しくなりました記憶から取り出します話には荒唐無稽こうとうむけいな夢のようなこともあるのでございますよ」

と、微笑を作りながら夫人のながめる姫君は、艶えんにきれいな顔をしていて、しかも平生よりはめいったふうが見えた。自身の子ながらももつたいたなく思われるこの人の心を、傷つけるような話を自身の母がして煩悶はんもんをしているのではないか、お后きさきの位にもこの人の上る時を待つて過去の真実を知らせようとしていたのであるが、現在はまだ若いこの人でも、昔話から母の自分をうとましく思うことはあるまいが、この人自身の悲観

することにはなろうと明石夫人は憐あわれんだ。加持が済んで僧たちの去ったあとで、夫人は近く寄って菓子などを勧め、

「少しでも召し上げれ」

と心苦しいふうに姫君を扱っていた。尼君はりっぱな美しい桐壺きりつぼの方に視線をやつては感激の涙を流していた。顔全体に笑みえを作つて、口は見苦しく大きくなっているが、目は流れ出す涙で悲しい相になっていた。困るというように明石は目くばせをするが、気のつかないふうをしている。

「老いの波かひある浦に立ちいでてしほたるあまをたれか咎とがめん

昔の聖代にも老齡者は罪すすりばしされないことになっていたのでございますよ」
と尼君は言った。硯箱すすりばしに入れてあつた紙に、

しほたるあまを波路のしるべにて尋ねも見ばや浜の苦屋とまやを

こんな歌を姫君は書いた。明石も堪えがたくなって泣いた。

世を捨てて明石の浦に住む人も心の闇は晴るけしもせじ

などと言つて、この場の悲しい空氣の密度をより濃くすまいとした。姫君は祖父に別れた朝のことなどを、心には忘れていても、夢の中だけにも見たいのが見えぬのは残念であると思つた。

三月の十幾日に桐壺の方は安産した。その時までにはあぶないことのようにして、多くの祈祷が神仏にささげられていたのであるが、たいした苦しみもなく、しかも男宮をお生みしたのであったから、この上の幸福もないように院のお心も落ち着いた。こちらは蔭の場所のようになっていた所で、ただ風流な座敷が幾つも作られてある建物では、いかめしい今後続いてあるはずの産養うぶやしなひの式などに不便であつて、老尼君のためにだけうれしいことと見えても、外見へは不都合であるために、南の町へ産屋うぶやを移す計画ができていた。紫の女王にょおうも出て来た。白い服装をして母らしく若宮をお抱きしている姫君はかわいく見えた。紫夫人は自身に経験のないことであつたし、他の人の場合にもこうした

産屋などに立ち合つたことはなかつたから、幼い宮を珍しくおかわいく思うふうが見えた。まだあぶないように思われるほどの小さい方を女王は始終手に抱いているので、ほんとうの祖母である明石夫人は、養祖母に任せきりにして、産湯の仕度などにばかりかかつていた。東宮宣下の際の宣旨拝受の役を勤めた典侍がお湯をお使わせするのであつた。迎え湯を盥へ注ぎ入れる役を明石の勤めるのも氣の毒で淑景舎の方の生母がこの人であることは知らないこともない東宮がたの女房たちは目をとめて、どこかに欠点でもある人なら当然のこととも思つておられようが、あまりに氣高い明石の姿はこの人たちに畏敬の念を起こさせて、未来の天子の御外祖母たる因縁を身に備えて生まれた人に違いないというようなことも思わせた。お湯殿の式のくわしい記事は省略する。

六日めに以前の南の町の御殿へ桐壺の方は移つた。七日の夜には宮中からのお産養があつた。朱雀院が世捨て人の御境遇へおはいりになつたために、そのお代わりにあそばされたことであつたらしい。宮中から頭の弁が宣旨で来て、この日の派手な祝宴を管理した。纏頭の品々は中宮のお志で慣例以上の物が出された。親王がた、諸大臣家からもわれもわれもとはなやかな御祝い品の来るお産屋であつた。この際の祝宴については、いつも華奢に流れることは遠慮したいとお言いになる院も、あまりお止めにはならな

かったために、目もくらむほどのお産養の日が続き、ぼんやりとしていた筆者にその際の洗練された細かな物好みで製作されたおのこの式の賀品などのことによく気がつかなかった。

院は若宮をお抱きになって、

「大將が幾人も持った子を今まで見せないのを恨めしく思っていたが、こんなかわいい方が授かった」

と愛しておいでになるのはごもつともなことである。毎日物が引き伸ばされるように若宮は大きくおなりになるのであった。乳母めのとなどは新しい人をお見つけになることは当分されずに、これまでの六条院の女房の中から、身柄も性質もよい人ばかりを選んでお付けになった。明石夫人が聡明そうめいで、気高けだかい、おおような心を持つていながら、ある場合に卑下することを忘れずに、自身が表に出ようとすることのない態度のとれることについてにはほめない人はなかった。紫夫人は顔をあらわに見せて話すようなことは今までこの人となかったのであるが、今度はよく睦まじく話して、過去においては長く僭越せんえつな競争者であると思っていた人に好意を持ちうるようになり、若宮を愛する気持ちの交流があらたたかい友情までも覚えさすことになった。女王にょおうは子供好きであったから、天兒あまがっの人形

などを自身で縫ったりしている時はことさら若々しく見えた。日夜を若宮のために心をつかう紫夫人であった。明石の老尼は、若宮を満足できるほど拝見することのできないのを残念に思っていた。しかしそれがかえって幸いであつたかもしれぬ、なおしばらくでもそばでお愛し申し上げるような時間が許されたものであれば、あとの恋しい思いで尼は死んだかもしれないから。

明石の入道も姫君の出産の報を得て、人間離れのした心にも非常にうれしく思われ
て、

「もうこれでこの世と別な境地へ自分の心を置くことができる」

と弟子どもに言い、明石の邸宅を寺にし、近くの領地は寺領に付けて以前から播磨はりまの奥の郡こおつに人も通いがたい深い山のある所を選定して、最後のこもり場所としてあつたものの、少しまだ不安な点が残していく世にあつて、なおそこへは移らなかつた山の草庵そうあんへ、もう今後の子孫の運は仏神にお頼みするばかりであるとして入道は行ってしまうのであつた。近年はもう京の家族も順調に行っていることに安心して、使いを出してみることもなかつたのである。京から使いが送られた時にだけ短いたよりを尼君へ書いて来た。入道はいよいよ明石を立つ時に、娘の明石夫人へ手紙を書いた。

この幾年間はあなたと同じ世界にいらすずに他界で生存するもののような気持ちでたいしたことのない限りはおたよりを聞こうともしませんでした。仮名書きの物を読むのは目に時間がかかり、念仏を怠ることになり、無益であるとしたのです。またこちらのたよりもあげませんでした、承ると姫君が東宮の後宮へはいられ、そして男宮をお生み申されたそうで、私は深くおよろこびを申し上げる。その理由ははじめな僧の身で今さら名利を思うのではありません。過去の私は恩愛の念から離れることができず、六時の勤行をいたしながらも、仏に願うことはただあなたに關すること、自身の浄土往生の願いは第二にしていきましたが、初めから言えば、あなたが生まれてくる年の二月の某日の夜の夢に、こんなことを見たのです、私自身は須弥山しゆみせんを右の手にささげているのです。その山の左右から月と日の光がさしてあたりを照らしています。私には山の陰影かげが落ちて光のさしてくることはないのです。私はその山を広い海の上に浮かべて置いて、自身は小さい船に乗って西のほうをさして行くので終わったのです。その夢のさめた朝から私の心にはある自信ができたのですが、何によつてそうした夢に象徴されたような幸福に近づきうるかという見当がつかなかったところ、ちょうどそのころから母の胎に妊はらまれたのがあなたです。普通の書物にも仏

典にも夢を信じてよいことが多く書かれてありますから、無力な親でいてあなたをたいせつなものにして育てていましたが、そのために物質的に不足なことのないようにと京の生活をやめて地方官の中へはいったのです。ここでまた私の身の上に悪いことが起こり、しまいに土着して出家の人になり、あなたは姫君をお生みになったそのころのことは知っておいになるとおりです。その時代に私は多くの願を立てていましたが、皆神仏のお容れになることになり、あなたは幸福な人になりました。姫君が国の母の御位をお占めになった暁には住吉の神をはじめとして仏様への願果たしをなさるようにと申しておきます。私の大願がかった今では、はるかに西方の十萬億の道を隔てた世界の、九階級の中の上の仏の座が得られることも信じられます。今から蓮華をお持ちになる迎えの仏にお逢いする夕べまでを私は水草の清い山にはいつてお勤めをしています。

光いでん暁近くなりにはけり今ぞ見しよの夢語りする

そして日づけがある。またあとへ、

私の命の終わる月日もお知りになる必要はありません。人が古い習慣で親のために着る喪服などもあなたはお着けにならないでお置きなさい。人間の私の子ではなく、別な生命いのちを受けているものとお思ひになつて、私のためにはただ人の功德くどくになることをなさればよろしい。この世の愉樂をわが物としておいでになる時にも後世ごせのことを忘れぬようになさい。私の志す世界へ行つておれば必ずまた逢うことができるのです。娑婆しゃばのかなたの岸も再会の得られる期の現われてくることを思つておいでなさい。

こう書いて終わつてあつた。また入道が住吉やしろの社へ奉つた多くの願文を集めて入れた沈じんの木の箱の封じものも添えてあつた。尼君への手紙は細かなことは言わずに、ただ、この月の十四日に今までの家を離れて深山みやまへはいます。つまりぬわが身を熊狼くわうわみにします。あなたはなお生きていて幸ひの花の美しく咲く日におあいなさい。光明の中の世界でまた逢いましょう。

と書かれただけのものであつた。読んだあとで尼君は使ひの僧に入道のことを聞いた。

「お手紙をお書きになりましたから三日いっぴくにちめに庵いおつを結んでおかれました奥山へお移りになつたのでございます。私どもはお見送りに山の麓ふもとへまで参つたのですが、そこから皆

をお歸しになりました、あちらへは僧を一人と少年を一人だけお供にしてお行きになりました。御出家をなさいました時を悲しみの終わりかと思いましたが、悲しいことはそれで済まなかつたのでございます。以前から仏勤めをなさいますひまひまに、お身体からだを樂になさいましてはお弾ひきになりました琴きんと琵琶びわを持つてよこさせになりました、仏前でお暇いしやま乞いにお弾きになりましたあとで、樂器を御堂みどうへ寄進されました。そのほかのいろいろな物も御堂へ御寄付なさいまして、余りの分をお弟子でしの六十幾人、それは親しくお仕えした人数ですが、それへお分けになり、なお残りました分を京の御財産へおつけになりました。いっさいをこんなふうに清算なさいまして深山みやまの雲霞くもかすみの中に紛れておはいりになりましたあとのわれわれ弟子どもはどんなに悲しんでいるかしれません」

と播磨はりまの僧は言つた。これも少年侍として京からついて行つた者で、今は老法師で主に取り残された悲哀を顔に見せている。仏の御弟子で堅い信仰を持ちながらこの人さえ主を失つた歎なげきから脱しうることができないのであるから、まして尼君の歎きは並み並みのことでなかつた。

明石夫人あかしはたいてい南の町のほうへばかり行つていたが、明石の使いが入道の手紙をもたらししたことを尼君が報らせて来たため、そつと北の町へ歸つて来た。この人は自重

していて少しのことによって軽々しく往來する（ゆきき）ことはしないのであるが、悲しいたよりがあったというので忍びやかに出て来たのである。見ると尼君は非常に悲しいふうをしてすわっていた。燈（とも）を近くへ寄せさせて夫人は手紙を読んでみると、自身からもとどめがたい涙が流れた。他人にとっては何でもないことも子としては忘れがたい思い出になる昔のことが多くて、常に恋しくばかり思われた父は、こうして自分たちから永久に去ったのかと思うと、どうしようもない深い悲しみに落ちるばかりであった。この夢の話によつて、自分に不相応な未来を期待して、人並みの幸福を受けさせずに苦しめる父であるようにある時代の自分が恨んだのも、一つの夢を頼みにした父であったからであると、はじめて理解のできた氣もした。少したつて尼君は、

「あなたがあつたために輝かしい光榮にも私は浴しています、またあなたのためにどれほどの苦勞を心でしたことか。たいしたことのない家の子ではあつても、生まれた京を捨てて田舎（いなか）へ行つたころも不運な私だと思われましたがね。あとになつて生きながら別れなければならぬとは予想せずに、同じ蓮華（れんげ）の上へ生まれて行く時まで変わらぬ夫婦でいようとも互いに思つて、愛の生活には満足して年月を送つたのですが、にわかになたの境遇が変わつて、私もそれといつしよに捨てた世の中へ歸り、あなたがたが幸福

に恵まれるのを目に見ては喜びながらも、一方では別れ別れになっている寂しさ、たよ
りなさを常に思つて悲しんでいましたが、とうとう遠く隔たったままでお別れしてし
まったのが残念に思われます。若い時代のあの方も人並みな処世法はおとりにならず
に、風変わりな人だったが、縁あつて若い時から愛し合った二人の中には深い信頼が
あつたものですよ。どうしてこの世の中でいながら逢^あうことのできない所へあの方は
行つておしまいなすつたのだろう」

と言つて泣いた。夫人も非常に泣いた。

「こうお言いになつても、すばらしい将来などというものが私にあるものですか。価値^{ねうち}
のない私がどうなりうるものでもないのですから、私を愛してくだすつたお父様にお目
にかかることもできずにいるこの悲しみにそれは代えられるほどのものと思われません
が、私たちは幸福な姫君をこの世にあらしめるために、悲しい思いも科せられているも
のと思うよりほかはありません。そんなふうにして山へおはいりになつては、無常のこ
の世ですもの、知らぬまにおかくれになるようなことになつては悲しゅうございます
ね」

とも言ひ、夜通し尼君と入道の話をしていた。

「昨日は私のあちらにいますのを院が見ていらつしやったのですから、にわかには消えたようにこちらへ来ていましては、軽率に思召すおぼしめでしょう。私自身のためにはどうでもよろしゅうございますが、姫君に累を及ぼすのがおかawaiiそうで自由な行動ができませんから」

こう言つて夫人は夜明けに南の町へ行くのであつた。

「若宮はいかがでいらつしやいますか。お目にかかることはできないのですかね」
このことでも尼君は泣いた。

「そのうち拝見ができますよ。姫君もあなたを愛しておいでになつて、時々あなたのことをお話しになりますよ。院もよく何かの時に、自分らの希望が実現されていくものなら、そんなことを不安に思つては濟まないが、なるべくは尼君を生きさせておいてみせたいと仰せになりますよ。御希望とはどんなことでしよう」

と夫人が言ふと、尼君は急に笑顔えがおになつて、

「だから私達の運命というものは常識で考えられない珍しいものなのですよ」
とよろこぶ。手紙の箱を女房に持たせて明石は淑景舎しげいしやの方かたの所へ歸つた。

東宮から早く参るようという御催促のしきりにあるのを、

「ごもつともですわね。若宮様もいらつしやるのですもの、どんなに早くお逢いあそばしたいでしょう」

と紫夫人も言つて、院は若宮を東宮へお上らせする用意をしておいでになった。桐壺の方は退出のお許しが容易に得られなかったのに懲りて、この機会に今しばらく実家の人になつていたい気持ちでいるのである。小さい身体で女の大難を経てきたのであったから、少し顔が痩せ細つて非常に艶な姿になつていた。

「はつきりとなさいませんから、もう少しこちらで御養生をなさいますほうがいいと思います」

と言うのは明石夫人の意見であつた。

「少し細られたこの姿をお目にかけるのはかえつてまたよい結果のあるものなのだ」

などと院は言つておいでになるのである。明石は紫の女王などが対へ歸つたあとの静かな夕方に、姫君のそばへ来て、文書のはいつた沈の木箱を見せ、入道のことを語るであつた。

「すべてのことが成り終わりますまでは、こんな物をお目にかけないほうがいいのかも知れませんが、人の命は無常なものでございますからね。何も御承知にならぬうちに私

が亡^なくなりますことがありまして、必ずしも臨終にあなた様のおいでがいただける身の上でもございませんから、とにかく健在なうちにこうしたこともお聞かせしておくほうがよいと存じまして、それに字が悪くて読みにくいものでございますがこの手紙も見せすることにいたしましたから、御覧なさいませ。この箱の中の願^{がん}文^{もん}はお居間の置き棚^{だな}などへしまってお置きになりました、何をなさることも可能な時がまいりましたら、これに書かれてございます神様などへ入道がいたしました願^{むく}のお酬^{むく}いをなすってくださいませ。他人にはお話をなさらないほうがよろしゅうございます。私はもうあなたのお身の上で何が不安ということもなくなったのでございますから、尼になりたい気がしきりにいたすのでございまして、長くお世話を申し上げることはできないでございましょう。あなたは対のお母様の御恩をお忘れになつてはいけませんよ。ありがたい方でございます。拝見いたしました、ああしたりっぱな人格の方は必ず命も長くお恵まれになるだろうと思っております。あなたとごいっしょにおりますことはあなたの幸福でないと思ひが思ひまして、はじめて女王様にあなたをお譲り申し上げました時には、これほどまでの愛をあなたにお持ちになることは想像できませんで、それ以後もただ世間並みのよいといわれる継母^{ままはは}ぐらいのことと思ひましたが、あの方の御愛情はそんなものではあり

ませんでした。あの方にお任せいたしますほど安心なことはないとよく私はわかったの
でございます」

などと明石は淑景舎しげいしゃに言った。姫君は涙ぐんで聞いていた。実母に対しても打ち解けたふうができず、おとなしくものの多く言われない姫君なのである。入道の手紙は若い心に無気味なこわい気のされるようなことが、古檀紙の分厚い黄色がかった、それでも薫物たきものの香の染しんだのへ五、六枚に書かれてあるのを、姫君は身にしむふうで読んでいて額髪が涙にぬれていく様子が艶えんであった。

院は女三にょさんの宮みやのお座敷のほうにおいてになったのであるが、中の戸をあけてにわかはこちらへお見えになったのを知って、明石夫人は急なことで姫君の前に出された文書類を隠すことができず、几帳きちょうを少し前のほうへ引き寄せ、自身もその蔭かげへ姿を隠してしまった。

「若宮が私の足音でお目ざめになりませんでしたか。しばらくでも見ずにいては恋しいものだから」

と院がお言いになっても姫君は黙っているのを見て、明石が、
「対へおつれになったのでございます」

と言った。

「けしからんね、若宮をわが物顔にして懷中ふとひからお放ししないのだから。始終自身の着物をぬらして脱ぎかえているのですよ。軽々しく宮様をあちらへおやりするようなことはよろしくない。こちらへ拝見に来ればいいではないか」

「思いやりのないことを仰せになります。内親王様であってもあの女王様に御養育おされになるのがふさわしいことと存じられますのに、まして男宮様は、そんなに尊貴ごじやうだんでありあそばしても、あちこちおつれ申すほどのことが何でございましょう。御冗談ごじやうだんにでも女王様のことをそんなふうにおっしゃってはよろしくございません」

明石夫人はこう抗弁した。院はお笑いになって、

「ではもうあなたがたにお任せきりにすべきだね。このごろはだれからも私は冷淡に扱われる。今のようなたしなめを言ったりする人もある。そうじゃありませんか、こんなに顔を隠していて、私を悪くばかり」

と、お言いになって、几帳を横へお引きになると、明石は清い顔をして中の柱に品よくよりかかっているのであった。先刻さつきの箱もあわてて隠すのが恥ずかしく思われてそのままにしてあった。

「何の箱ですか。恋する男が長い歌を詠^よんで封じて来たもののような気がする」

院がこうお言いになると、

「いやな御想像でございますね。御自身がお若返りになりましたので、私どもさえまで承ったこともないような御冗談をこのごろは伺います」

と明石は言つて微笑を見せていたが、悲しそうな様子は瞭然^{りようぜん}とわかるのであつたら、不思議に思いになるふうのあるのに困つて、明石が言つた。

「あの明石の岩窟^{いわく}から、そつとよこしました経巻とか、まだお酬^{むく}いのできておりません願文の残りとかなのでございますが、姫君にも昔のことをお話しする時があれば、これもお目にかけたらどうかと申してもまいっているのですが、ただ今はまだそうしたものを御覧なさいます時期でもないのでございますから、お手をおつけになりません」

お聞きになつて、娘と母に悲しい表情の見えるのももつともであるとお思ひになつた。

「あれ以後ますます深い信仰の道を歩んでおいでになることであろう。長命をされて長い間のお勤めが仏にできたのだから結構だね。世間で有名になっている高僧という者も

よく観察してみると、俗臭のない者は少なく、賢い点には尊敬の念も払われるが、私には飽き足らず思われる所がある、あの人だけはりっぱな僧だと私にも思われる。僧がらずにしながら、心持ちはこの世界以上の世界と交渉しているふうに見えた人ですよ。今ではまして係累もなくなつて、超然としておられるだろうあの人が想像される。手輕な身分であればそつと行つて逢^あいたい人だ」

院はこうお言いになつた。

「ただ今はもうあの家も捨てまして、鳥の声もせぬ山へはいつたそうでございます」

「ではその際に書き残されたもののだね。あなたからもたよりはしていますか。尼さんはどんなに悲しんでおいでになるだろう。親子の仲とはまた違つた深い愛情が夫婦の仲にはあるものだからね」

院も涙ぐんでおいでになつた。

「あれからのいろいろな経験をし、いろいろな種類の人にも逢^あつたが、昔のあの人ほど心を惹^ひく人物はなくて、私にも恋しく思われる人なのだから、そんなことがあれば夫婦であつた尼君の心はいたむことだろう」

ともお言いになる院に、入道の夢の話をお思い合わせになることがあろうもしれぬと

明石夫人はその手紙を取り出した。

「変わった梵^{ぼんじ}字とか申すような字はこれに似ておりますが読みにくい字で書かれましたものでも御参考になることが混じっているようでございますからお目にかけます。昔の別れにももう今日のあることを申ししておりまして、あきらめたつもりでおりまして、やはりまた悲しゅうございます」

と言ひ、感じの悪くない程度に泣いた。院は手にお取りになつて、

「りつぱじゃありませんか。老いぼけてなどいないいい字だ。どんな芸にも達しておられて、尊敬さるべき人なのだが、処世の術だけはうまくゆかなかつた人だね。あの人の祖父の大臣は賢明な政治家だったのが、ある一つのことと失敗をされたために、その報いで子孫が栄えないなどと言う人もあつたが、女系をもつてすれば繁栄でないとは言われなくなったのも、あの人の信仰が御^{みほとけ}仏を動かしたといつてよいことです」

などと言ひ、涙をぬぐいながら読んでおいでになつたが、夢の話の所はことに院の御注意を惹^ひいた。常人の行ないができずに、むやみに思ひ上がった望みを持つ男である人の批難を受け、自分なども非常識に狂氣じみて結婚を強要する人だと疑つて思つていたことも、姫君が生まれてきたことで、前生の因縁がかくあつた間柄であると認めたの

であるが、なおそれ以外の未来にどんな望みを入道が持っているかは知らずにいたが、これで見れば初めから君王の母がその家から出る確信があったらしい。冤罪えんざいを蒙こうむつて漂泊してまわる運命を自分が負ったことも、この姫君が明石で生まれるためなのであった。神仏にかけた願はどんなものであったのであろうと、心で拝をなされながらその箱を院はお取りになった。

「これといっしょにあなたに見せておきたいものもありますから、またそのうち私からもお話しすることにしよう」

と院は姫君へお言いになった。そのついでに、

「もうあなたは自分の生まれてきた事情を明らかに知ることができたでしょうが、あちらのお母様の好意をおろそかに思つてはなりませんよ。真実の親子、肉身の仲でなくて、他人が少しでも愛してくれ、親切にしてくれるのはありがたいことだと思わなければならぬ。まして実母があなたのそばへ来たあとまでも初めどおりにあなたを愛することが変わらずに、あなたに幸福があるようにとばかりあの人は願っています。昔からある継母話ままははのように、表面だけを賢そうにして継子ままこの世話をする、それはまあよいと見られている母親も、また曲がった心で娘を苦しめている母親も、娘のほうで善意にばか

りものを解釈して信頼してやれば、こんな人を憎んでは罪になるという気がして反省するのがありますし、またよい性格の人であれば、継娘ままこに気に入らぬ所はあっても、母として信頼される立場になつては、いつとなく最初の態度を変えるのもあるでしょう。何でもないことに難くせをつけ、愛の皆無な思いやりのない継母でとうてい娘のほうから近づけないのもあるでしょう。私はそうたくさん女の人を知っているのではないが、とにかく私の知っている人で、生まれもよく、婦人としての見識も備わった人で、またそれぞれの長所を持った人でも、自分の娘を託しうる人をその中から選ぶ出すのは困難です。真に心の癖のないよい女性は対のお母様以外にありません。これこそ善良な女性といふべきだと私は信じている。善良といつても単にお人よしの締まりのない人は頼みになりません」

と訓おしえておいでになるのを聞いていて、紫夫人の偉さが明石にうなずかれた。

「あなただけはその訳もわかる人なのだから、仲よくしてこの方のお世話もいっしょにしてください」

とまた小声で明石へお言いになった。

「ただ今まで仰せにはなりません。が女王様の御好意がよくわかるものでございますか

ら、毎度そのことをお話しいたしております。私を失礼な女と思召すのでございましたら、この方をこれほどにお愛しにもならないでございましょうが、自分で片腹痛く存じますまでに私を御同等な人のようにお扱いただきますから、私は恐縮いたすばかりでございます。何の価値もない私などが亡くなりもしませういつまでも姫君のおそばにおりますのは、世間の聞こえもよろしくないことと御遠慮がされますのを、女王様の御好意でどうやら邪魔者らしくなくしていられます」

と明石が言うと、

「あなたに尽くす心などはないだろうが、姫君を母として愛する心を今になって分けてもらいたいために譲るところがあるのでしよう。あなたもまた実母の権利を主張なさらないから双方の間が円満にいつて、私はこれほど安心のできることはない。ちよつとしたことにもあさはかな邪推などする人が一人でもあれば周囲の人は迷惑するものですかね。あなたがたには欠点がないから私は苦心をすることもない」

この院のお言葉を聞いて、明石は謙遜けんそんをしてよかったと思つた。院は対のほうへお歸りになった。

「ますます女王様にょおうに御愛情が傾くようですね。實際だれよりもすぐれた、あらゆるもの

を具足した方なのですから、ごもつともだとわれわれでさえ思うというのは幸福な方です。宮様を表面だけりっぱなお扱いをなすつても、あちらにおいてになることが多いのですもの、もったいないことともいわれます。御身分から申しても宮様が一段上の方なのですもの」

などと姫君に語りながらも、明石^{あかし}はいささか自信を持つことができるのであった。それは姫君を持つていることにおいてである。高貴な方でさえ飽き足らぬ待遇を受けておいでになる夫人の中の一人で、薄い院の御愛情などをとやかく自分などは思うべきでない、そのことではあきらめができていて、明石の心に悲しく思われるのは深い山へはいった父の入道のことだけであつた。尼君も終わりの文^{ふみ}に書かれた良人^{おつと}の一言を頼みにして、未来の世を考えながらも物思わしくしていた。

源大將は女三の宮をあるいは得られたかもしれぬ立場にいた人であつたから、六条院に来ておいでになるのを無関心でいることもできなかった。院の御子としてその御殿へ近づく機会もあつて、それとなく観察しているのであつたが、ただ若々しくおおうなという点だけのよさがある方のように、壮麗な六条院の本殿へお住ませになつて、今後の例になるまで派手^{はで}な御待遇をしておいでになつても、それだけの貴女たる価値のあり

なしをこの人には疑われた。女房なども落ち着いた年齢の人は少なく、若い美人風、派手な騒ぎをするようなのが数も知れぬほどお付きしていて、歡樂的な空氣の横溢おちいつしているお住居すまいであつたから、そんな中に内気なおとなしい人が混じつて物思ひをしても輕佻けいちように騒ぐ仲間にかくれて、それも同じように朗らかなふうをしていたり、毎日幼稚なお遊びの相手ばかりをしている童女の教養なさなどを院は氣持ちよくは思召おぼしめさなかつたが、一つの趣味の目でもものを見ようとされぬ方であつたから、それはそれとして許して見ておいでになつて、御干涉もあそばさなかつた。夫人になられた宮に對してだけはよくお教へになるのであつたから、以前よりは少しごりつばな方らしくおなりになつた。そんなことが外聞にも知れてくるのを大將は見て、すぐれた人の少ない世だ、紫の女王がこんなに長い間ごいっしょにおられても、だれにもどんなふうな、どんな女性であるという想像もさせない重々しさがあつて、靜かに深みのある女であることを願つて、またさすがに明朗な態度をとり、他を輕侮せず自身の自尊心を傷つけない用意があると思ひ、何年かの前に野分のわきの夕べに見た面影が忘れがかつた。自身の夫人を愛する心は変わらなかつたが、その人は相手にしがいのある優越した女性でなかつた。恋人を妻にしたあとの安心した氣持ちと、その人ばかりを見ている目の倦怠けんたいさで、父君が異なつた幾

人の夫人を集めておいでになる六条院の生活がうらやましくて、だれも皆自分の妻よりも相手にしておもしろい人のように思われてならないのである。その中で姫宮は御身分からいつても最も若い思ひ上がった大将などには興味の惹かれる御存在ではあつたが、表面をお飾りになるだけの愛情以外の何ものもないような院の御待遇がこの人によくわかつていて、あるまじい心を起こしたというでもなしに、お顔の見られる時があればよいとは願っていた。右衛門督も始終六条院へ参っている人であつた。この宮を山の帝がどんなにお愛しあそばしたかもくわしく知っていて、御婿選びの時以来この宮に好意を持ち、この求婚者には院の帝も決してもつてのほかのこととは仰せられなかつたという報は得たのでありながら、宮は六条院へ入嫁されたのを残念に思い、心も傷つけられたほどに苦しんで、今でも衛門督は恋を捨てていなかった。そのころから心安くなつた女房によつて、宮の御様子を聞くのをはかない慰めにしていたのである。

「やはり対の夫人とは御競争がおできにならないようだ」

と世間の人の噂するのが耳にはいる時、もつたいなくても自分の妻に得ておれば、そうした物思ひはおさせしなかつたはずである。二人とない六条院のようなりっぱな男で自分はないのであるがと、こんなことを言つて、始終心安くなつている小侍従という宮

の女房を煽動せんどうするようなことを言い、無常の世であるから、御出家のお志の深い院が御遁世とんせいになる場合もあったなら、自分は女三の宮を得たいと絶えず思っている右衛門督うえもんのかみであつた。

三月ごろの空のうらかな日に、六条院へ兵部卿ひょうぶきやうの宮がおいでになり、衛門督もお訪たずねして来た。院はすぐに出てお逢あいになった。

「ひまな私の所などはこの時節などが最も退屈で、気を紛らすことができずに困っていましたよ。どこも皆無事平穩なのです。今日はどうして暮らしたらいいだろう」

などと院はお言いになって、また、

「今朝大將けさが来ていたのだがどこにいるだろう。慰めに小弓でも射させたく思っている時にちょうどそれのできる人たちもまた来ていたようだったが、もう皆出て行つたのだろうか」

近侍にこうお聞きになった。大將は東の町の庭で蹴鞠けまりをさせて見ているという報告をお聞きになって、

「乱暴な遊びのようだけれど、見た目に爽快そうかいなものでおもしろい」
とお言いになり、

「こちらへ来るように」

と、院が大将を呼びにおやりになると、すぐに庭で蹴鞠をしていた人たちはこちらへ来た。若い公達きんだちが多かった。

「鞠もこちらへ持って来ましたか。だれとだれがあちらへ来ているのか」

大将の所にいた官人たちの名があげられ、

「それもこちらへ来させましょうか」

と大将は父君へ申した。寝殿の東側になった座敷には桐壺きりつばの方がいたのであるが、若宮をお伴いして東宮へ参ったあとで、そこは空き間あになっていて静かだった。蹴鞠の人は流水を避けて競技によい場所を求めて皆庭へ出た。太政大臣家の公達は頭弁とうのべんなどという成年者も兵衛佐ひょうえのすけ、太夫たゆうの君などという少年上りの人も混じって来ているが、他に比べて皆風采ふうさいがきれいであった。時間がたち日暮れになるまで、この競技に適して風も出ないよい日だと皆言って庭上の遊びは続いていたが、頭弁も闘志がおさえられなくなったらしくその中へ出て行つた。

「文官の誇りにする弁さえ傍観してられないのだから、高官になつていても若い衛府えふの人などはおとなしくしている必要もない。私の青春時代にもそうしたことの仲間には

いりえないのが残念に思われたものだ。しかし軽々しく人を見せるね、この遊びは」

院がお勧めになるので、大将も衛門督も皆出て、美しい桜の蔭^{かげ}を歩き歩いていたこの夕方の庭のながめはおもしろかった。あまり静かでないこの遊戯であるが、乱暴な運動とは見えないのも所がら人柄によるものなのであろう。趣のある庭の木立ちのかすんだ中に花の木が多く、若葉の梢^{こずえ}はまだ少ない。遊び気分の多いものであって、鞠の上げよりのよし悪しを競って、われ劣らじとする人ばかりであったが、本気でもなく出て混じった衛門督^{えもんのかみ}の足もとに及ぶ者はなかった。顔がきれいで風采の艶^{えん}なこの人は十分身の取りなしに注意して鞠を蹴り出すのであったが、自然にその姿の乱れるのも美しかった。正面の階段^{きざはし}の前にあたった桜の木蔭で、だれも花のことなどは忘れて競技に熱中しているのを、院も兵部卿の宮も隅^{すみ}の所の欄干によりかかって見ておいでになった。それぞれ特長のある巧みさを見せて勝負はなお進んでいったから、高官たちまでも今日はたしなみを正しくはおられぬように、冠の額を少し上へ押し上げたりなどしていた。大将も官位の上でいえば軽率なふるまいをすることになるが、目で見た感じはだれよりも若く美しく、桜の色の直衣^{のうし}の少し柔らかに着馴^ならされたのをつけて、指貫^{さしぬき}の裾^{すそ}のふくらんだのを少し引き上げた姿は軽々しい形態でなかった。雪のような落花が散りかか

るのを見上げて、萎れた枝を少し手に折った大将は、階段の中ほどへすわって休息をした。衛門督が続いて休みに来ながら、

「桜があまり散り過ぎますよ。桜だけは避けたらいいでしょうね」

などと言って歩いているこの人は姫宮のお座敷を見ぬように見ていると、そこには落ち着きのない若い女房たちが、あちらこちらの御簾のきわによつて、透き影に見えるのも、端のほうから見えるのも皆その人たちの派手な色の褌袖口ばかりであった。暮れゆく春への手向けの幣の袋かと思える。几帳などは横へ引きやられて、締まりなく人のいる気配があまりにもよく外へ知れるのである。

支那産の猫の小さくかわいいのを、少し大きな猫があとから追つて来て、にわかに御簾の下から出ようとする時、猫の勢いに怖れて横へ寄り、後ろへ退こうとする女房の衣ずれの音がやかましいほど外へ聞こえた。この猫はまだあまり人になつかないのであったのか、長い綱につながれていて、その綱が几帳の裾などにもつれるのを、一所懸命に引いて逃げようとするために、御簾の横があらわに斜に上がったのを、すぐに直そうとする人がない。その柱の所にいた女房などもただあわてるだけでおじけ上がった。几帳より少し奥の所に桂姿で立っている人があった。階段のある正面から一つ西に

なつた間の東の端であつたから、あらわにその人の姿は外から見られた。紅梅襲^{がさね}のか、濃い色と淡^{うす}い色をたくさん重ねて着たのがはなやかで、着物の裾は草紙の重なつた端のように見えた。桜の色の厚織物の細長らしいものを表着^{うわぎ}にしていた。裾まであざやかに黒い髪の毛は糸をよつて掛けたようになびいて、その裾のきれいに切りそろえられてあるのが美しい。身丈に七、八寸余つた長さである。着物の裾の重なりばかりが量高^{かき}くて、その人は小柄なほっそりとした人らしい。この姿も髪のかかつた横顔も非常に上品な美人であつた。夕明りで見るのであるからこまごまとした所はわからなくて、後ろにはもう闇^{やみ}が続いているようなのが飽き足らず思われた。鞠^{まり}に夢中でいる若公達^{わかきんだち}が桜の散るのにも頓着^{とんちやく}していぬふうな庭を見ることに身が入つて、女房たちはまだ端の上がつた御簾に気がつかないらしい。猫のあまりに鳴く声を聞いて、その人の見返つた顔に余裕のある気持ちの見える佳人であるのを、衛門督は庭にいて発見したのである。大將は簾^{すだれ}が上がつて中の見えるのを片腹痛く思つたが、自身が直しに寄つて行くのも軽率らしく思われることであつたから、注意を与えるために咳^{せき}払いをすると、立つていた人は静かに奥へはいつた。そうはさせながら大將自身も美しい人の隠れてしまったのは物足らなかつたのであるが、そのうち猫の綱は直されて御簾も下^おりたのを見て、大將は思わず

歎息たんそくの声を洩もらした。ましてその人に見入っていた衛門督の胸は何かでふさがれた気がして、あれはだれであろう、女房姿でない桂であつたのによつて思うのでなくて、人と混同すべくもない容姿から見当のほぼつく人を、なおだれであろうか確かに知りたく思つた。素知らぬ顔を大將は作つていたが、自分の見た人を衛門督の目にも見ぬはずはないと思つて、その貴女をお氣の毒に思つた。何ともしがたい恋しく苦しい心の慰めに、大將は猫を招き寄せて、抱き上げるとこの猫にはよい薰香たきものの香が染しんでいて、かわいいい声で鳴くものにもなんとなく見た人に似た感じがするといふのも多情多感といふものであらう。

院がこの若い二人の高官のいるほうを御覧になつて、

「高官たちの席があまりに軽々しい。こちらへおいでなさい」

とお言いになつて、対のほうの南の座敷へおはいりになつたので人々も皆従つて行つた。兵部卿の宮はまた室へやの中へ院とごいっしょに席を移してお落ち着きになつた。高官らもごいっしょである。殿上役人たちは敷き物を得て縁側の座に着いた。饗応きやうおうというふうでなく椿餅つばきもち、梨なし、蜜柑みかんなどが箱ふたの蓋に載せて出されてあつたのを、若い人たちは戯れながら食べていた。乾物類さかなの肴さかなでお座敷の人々へは酒杯が勧められた。衛門督はじつと

思い入ったふうをしていて、ともすれば庭の桜へ目をやった。大将はあの場を共に見た人であったから、衛門督が作っている幻の何であるかがわかる気もするのであった。

軽々しくあまりな端近へ出ておられたものであると大将は姫宮をお思いした。あれだけの方がなされることでもないのであるがと思われてくるにしたがつて、今まで不可解であったことに合点のゆく気もした。そんな欠点がありになるために、世間でたいした方のようにいう割合に院の御愛情が薄いという理由が発見されたのである。貴女らしいお慎みが足らず、無邪気であることは可憐かれんなものだが、その人の良人おとこになつては安心のできないことであろうと軽侮する念も起こった。衛門督は道義も何も思わぬ盲目的な情熱に燃えていた。思いも寄らぬ物の間からほのかながらも確かにその方を見ることができたのも、自分の長い間の恋の祈りが神仏に受け入れられた結果であろうと、こんな解釈をしながらも、ただそれが瞬間のことであつたのを残念がつた。

院は座中の人に昔の話をいろいろあそばして、

「太政大臣は私の相手で勝負をよく争われたものだが、蹴鞠けまりの技術だけはとうてい自分が敵することのできぬ巧さがおありになった。親のすべてが子に現われてくるものではないが、やはり芸の道だけは不思議によく伝わるものだね。あなたの今日のできは

えはたいしたものだった」

と衛門督へお言いになると、微笑を見せて

「他の点では父祖を恥ずかしめるような私でございますが、遺伝の蹴鞠の芸だけで後世へ名を残すことになりましたらそれで無事かもしれません」

と言った。

「何も悪くはない。どんなことでも人に出抜けたことは書いておいて後世へ伝うべきだから」

などと冗談じょうたんをお言いになる院の御様子の若々しくて、またお美しいのを衛門督は見て、自分は何によつてこの方をおいて宮のお心を自分へ向けることができようと院と自身を比較してもみたが、何からも優越したものを見いだされないのをついに知り、衛門督は寂しい心になって六条院を退出した。大将も帰りを共にして衛門督と車中で話合った。

「春の日の退屈を紛らわすのには六条院へ伺うのがいちばんよいことですね。また今日のようなひまの出来た時分、桜の散らぬ間にもう一度来るようにおっしゃっていましたから、春を惜しみがてらにこの月のうちにもう一度、その時は小弓をお供にお持たせに

なっていらいっしやい」

と大將は言うのであった。道の別れ目までこうして同車して行くのであったが、衛門督は女三によさんの宮のお噂うわさばかりがしたくて、

「院は今でも平生のお住居すまいは対のほうに決めていらっしやるそうですね。宮様はどんな気持ちでいられるだろう。朱雀院様すざくが御秘蔵になすった方が、第一の寵ちようを他の夫人に譲って、しかも同じ家におられるかと思うとお気の毒ですね」

こんな無遠慮なことを言い出すと、

「そんな失礼なことを院はなさいませんよ。対の夫人は普通にお婚めとりになったのでなく、御自身でお育てになった方だという事実から、少し違った親しみがおありになるだけでしょう。宮様を何事の上にも第一夫人として立てておられますよ」

と大將は否定した。

「そんなことはまあ言わないでお置きなさい。私は皆聞いて知っていますよ。とてもお気の毒な御様子でおられる時があるのだと言いますよ。光輝ある院の姫君がそれですよ。もつたない気のするのが当然じゃありませんか。」

いかなれば花に木伝ふ鶯の桜を分きてねぐらとはせぬ

春の鳥でいながらねえ。私には合点のいかないことですよ」

とも言う。穏当でないたとえをこの人はする、こんな乱暴なことを言うようになったのは、自分が想像したとおりに姫君を見た友が恋を覚えたものに違いないと大将は思った。

「深山木に峙定むるはこ鳥もいかでか花の色に飽くべき

あなたは誤解の上に立脚してお言いになるのだ」

と反対して言ったが、興奮している右衛門督とこの問題を語ることは避くべきである
と思い、あとはほかの話に紛らして別れた。

衛門督はまだ太政大臣家の東の対に独身で暮らしているのである。結婚にある理想を
持っていて長くこうして来たのであるが、時には非常に寂しく心細く思うこともあるもの、
自分ほどの者に思うことのかなわないことはないという自信を多分に持つて、そ

うした寂寥感せきりょうは心から追っているのであった。それがこの日の夕べからは頭が痛み出し、堪えがたい煩悶はんもんをいだくようになった。どんな時にまたあれだけの機会がつかめるであろう、どんなことも目だたずに済む階級の恋人であれば、その人の謹慎日とか、自分の方角除けとか、巧みな策略を作って、居所へうかがい寄ることもできるのであるが、これは言葉にも言われぬほどの深窓に隠れた貴女きじょなのであるから、どんな手段でも自分はこれほど愛する心をその人に告げるだけのこともできようとは思われないと衛門督は思うと胸が痛く苦しくなるあまりに、いつも書く小侍従への手紙を書いて送った。

この間は春風に浮かされて御園みそののうちへ参りましたが、どんなにその時の私がまた御心証を悪くしたことかと悲しまれます。その夕方から私は病氣になりまして、続いて今も病床にぼんやりと物思いをしております。

などと書かれてあつて、

よそに見て折らぬ歎なげきはしげれどもなごり恋しき花の夕かけ

という歌も添っていた。宮のお姿を衛門督が見たことなどは知らない小侍従であつた

から、ただいつもの物思いという言葉と同じ意味に解した。宮のお居間に女房たちもあまり出ていないのを見て、小侍従は衛門督の手紙を持って参った。

「この人がこの手紙にもございますように、今日までもまだあなた様をお思いすることばかりを書いてまいりますので困ります。あまりに気の毒な様子を見せられますと、私まで頭がどうかしてしまいそうで、どんな間違った手引きなどをいたすかしれません」
小侍従は笑いながら言うのであった。

「いやなことを言う人ね、おまえは」

無心なふうにそうお言いになって、宮は小侍従の^{ひろ}拡げた手紙をお読みになった。「見ずもあらず見もせぬ人の恋しくてひねもす今日はながめ暮らしつ」という古歌を引いて書いてある所を御覧になった時に、蹴鞠^{けまり}の日の御簾^{みす}の端の上がついていたことを思い出すことがおできになり、お顔が赤くなった。院が何度も、

「大將に見られないようになさい。あまりにあなたは幼稚にできていらつしやるから、うっかりとしていてのぞかれることもあるでしょうから」

こうお誠^{いまし}めになったのをお思い出しになり、大將からあの時のことが言われた時、院から自分はどんなにお叱^{しか}りを受けることであろうと、手紙の主が見たことなどは問題に

もあそばさずに、それを心配あそばしたのは幼いお心の宮様である。平生よりもものをお言いにならず黙っておしまいになったのを見て、小侍従はつぎほのない気がしたし、この上しいて申し上げてよいことでもなかったから、そつと手紙を持って行つた。そして忍んで返事を書いた。

この間はあまりに澄ましておいでになったものですから、軽蔑けいべつをしていらつしやると思つていたのですが「見ずもあらず」とはどういうことなのでしょう。もつたいないことですね。

今さらに色にな出いでそ山桜及ばぬ枝に思ひかけきと

むだなことはおよしなさいませ。

こんな手紙である。

「一冊堂・青空文庫」について

「一冊堂・青空文庫」は、青空文庫を紙の書籍で読むことができるよう、公開されているデータを pdf 形式に変換して、無料で配信させていただいております。変換に際して、旧仮名使い、ルビ等がうまく変換されない場合があります。できるだけ修正するようにしておりますが、お気付きの場合、ご連絡いただければ、早急に修正データをアップロードいたします。ご協力いただきますようお願い申し上げます。

青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp>) は、著作権の消滅した作品や「自由に読んでもらってかまわない」とされたものを、テキストと XHTML（一部は HTML）形式で公開しているインターネット電子図書館です。青空文庫は、そのサイト運営も含め、電子データの作成や校正作業などはボランティアの皆さんの活動によって支えられています。



一冊堂・青空文庫 pdf データ

2016 年 3 月 15 日 第一期製作

原稿 青空文庫

発行者 佐藤 聖

発行所 一冊堂

〒165-0025
東京都中野区沼袋 2-32-5 幸荘 C 室
mail : issatudo@gmail.com
